ルパンに会いたくて…2

横山智佐・声優ほやほや物語



ルパンに会いたくて…2

横山智佐・声優ほやほや物語



ルパンに会いたくて…2

横山智佐
声優ほやほや物語

発行・メディアワークス
発売・主婦の友社

カバーイラスト モンキー・パンチ

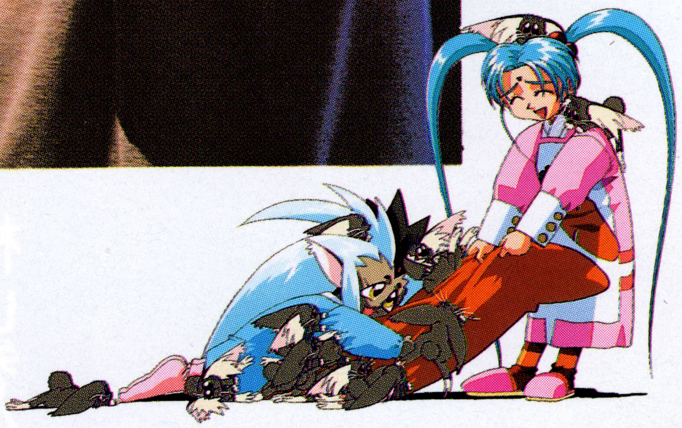
ルパンに会いたくて…2

横山智佐・声優ほやほや物語

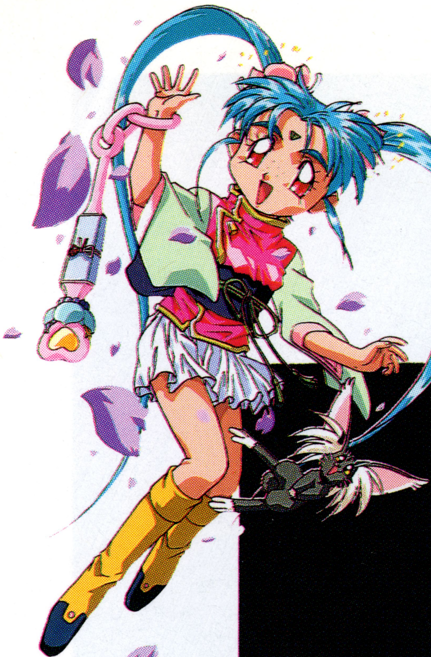
ルパンに会いたくて…2

横山智佐





『天地無用! LIVE"大天地祭'95"』(パイオニアLDCからLD&Video発売中)より。
撮影:矢野 力 (イラストは『天地無用! 魎皇鬼 第13話』より)





『パイオニアLDCイベント ワクワク・ドキドキPANIC TOUR』(『天地無用 TV1』
特典映像として収録。パイオニアLDCから好評発売中)より
撮影:矢野 力(イラストは、OVA『魔法少女プリティサミー』より)



銀河お嬢様伝説ユナ2

横山智佐のらんらん・タマゴ・プリンセス









日本コダックから発売される最新PhotoCDより。
企画制作・総発売元／日本コダック㈱　企画制作／インナーブレイン㈱

A・B・Chisa







A•B•Chisa



最新アルバム、パイオニアLDCより好評発売中!

撮影／城ノ下俊治　

郵便はがき

おそれいりますが
50円切手を
おはりください

101-□□

東京都千代田区神田駿河台1-8
東京YWCA会館5階

株式会社メディアワークス

「コミック編集部」行

ご住所(〒　　) 都道府県 TEL　-　-		
お名前	男・女	歳
ご職業(学校名)		

このアンケートをご返送していただいた方の中から、年1回100名の方に小社オリジナルグッズを、抽選の上さし上げます。発表は発送を持ちましてかえさせていただきます。

「ルパンに会いたくて…2」愛読者カード

この度は小社の単行本をご購読いただき、ありがとうございます。このカードは編集の資料として役立たせていただきますので、下記の質問にお答えください。

❶この本を最初に知ったのは何によってですか？

・雑誌広告（誌名　　　　　　）　・雑誌の紹介記事を読んで（誌名　　　　　　）

・本にはさんであるチラシ（本タイトル　　　　　　）

・書店で見て　　・テレビラジオで（番組名　　　　　　）

・人にすすめられて

・その他（　　　　　　）

❷カバーについて（とても良い　良い　ふつう　良くない　とても良くない）

❸内容について（とても良い　良い　ふつう　良くない　とても良くない）

❹下記の雑誌の中で購読しているものに○をつけて下さい。

・電撃王　・電撃コミックガオ！　・電撃スーパーファミコン

・電撃PCエンジン　・電撃プレイステーション　・電撃アドベンチャーズ

・電撃大王　・電撃少年　・B-CLUB

❺上記以外で購読している雑誌は何ですか？

（　　　　　　）

❻よく聴いているラジオ番組は何ですか？

（　　　　　　）

❼『ルパンに会いたくて…　横山智佐声優への道』（小社刊）について。

・持っている　・知っているが持っていない　・知らなかった

❽『天使がくれた休日（横山智佐の留学体験記）』（小社刊）について。

・持っている　・知っているが持っていない　・知らなかった

❾横山智佐以外で、あなたの好きな声優は誰ですか？

（　　　　　　）

❿この本に対するご意見、ご感想を自由にお書き下さい。

（　　　　　　）

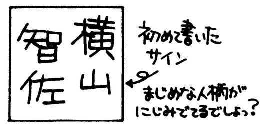
ルパンに会いたくて♥♥♥2

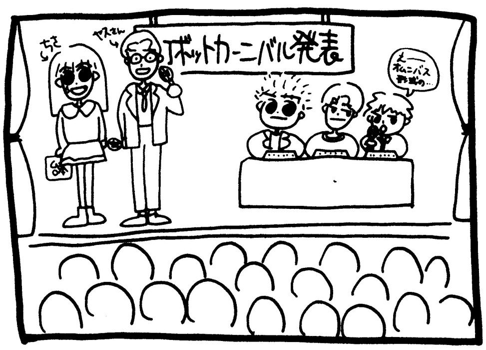
横山智佐・声優ほやほや物語

CONTENTS

カバーイラスト――モンキー・パンチ
装丁――――――荻窪裕司

初仕事


横山
智佐
初めて書いた
サイン
まじめな人柄が
にじみでてるでしょっ?


ちさ
ヤスさん
ボットカーニバル発表
え——
オムニバス

オーディションを受けてからちょうど1週間。
運命の電話が鳴った。

「弥生役、横山さんに決まりました！」

はじめてのアニメだ。
これで、これでアニメに出られるんだ。
涙が湧いてきて、ボロボロあふれた。
信じられないほどしあわせだ。
こんなにも生きていることがうれしいなんて……。
「やぁったあ――――!!」
大声で、屋根が弾け飛ぶほど、力の限り叫んでみた。
わたしは、声優の養成所に通うことを許してくれたパパとママに、心から感謝した。

●

「衣裳、メイクなどはつきませんから、自分でお願いします」

と、わたしが所属することになった事務所のアーツビジョンから電話がきたのが水曜日。
それから4日後の日曜日が、わたしの声優としての初仕事の日だった。
わたしは、オーディションに受かって『ロボットカーニバル』の弥生役の声を当てることになった。
この作品の制作発表イベントが、記念すべき最初のお仕事。
司会の人のアシスタントをするのが、わたしの役目だ。
(今までアニメーションのイベントなんて見たことがない。何を話したらいいんだろう)
すごく心配だ。
いったいどんな人がお客さまなんだろう。
〝衣裳〟と言われても、わたしは普通の高校2年生だ。きれいなお洋服なんて持っていない。
子供のころから姉のお下がりばかり着こなしてきたのだ。
〝メイク〟なんて、もっと謎の世界だ。
中学生の時、当時わたしが大好きだった風見しんごさんが出ていたドラマ『ヤヌスの鏡』のマネをして、長女の美奈と〝不良ごっこ〟をした時以来、メンタム薬用リップしかつけ

たことがない。この時は、いたずらで、真紫の口紅とほお紅をぬりたくって、いかにも不健康そうな表情でカメラをにらんで記念写真を撮ったのだ。
高校の演劇部で公演する時も、先輩やＯＢの人たちがメイクしてくれる。結局、自分ではお化粧したことがないのだ。
はじめてのお仕事がきた。
ルパンに会う、という夢に一歩近づいた。
ものすごくうれしい。
でも、まさか〝衣裳・メイク〟という壁があるなんて、思ってもいなかった。

次の日の夜。
めずらしく、家族全員が、晩ごはんのテーブルにそろった。
「ねえ知ってる？　ちーちゃんがね、アニメのイベントに出るんだって。すごいね!!」
ママが、誰に言うでもなく、みんなに呼びかけたのをきっかけに、我が家の晩ごはんが家族会議の場になった。
わたしは、今がチャンスとばかりに、議題を提出した。

「ちさ、悩んでるんだけど、どんな洋服着て行ったらいいかなぁ？」
「そうねえ……」
まず、長女の美奈が話にのってきた。美奈は、好奇心旺盛で世話やきさんだ。
「私のステージ衣裳、かしてあげようか？」
美奈は、オペラ歌手だから、ディズニーに出てくるお姫様のようなドレスをたくさん持ってるのだ。
「ええっ、ドレスなんか着たらヘンだよ。オーバーだよ」
わたしは、あわてて首を振った。
「そうかなぁ。あんたのイベント、どこでやるの？」
「えっ、えーと、原宿のラフォーレミュージアムだけど……」
「じゃあ平気だよ!!　あたしのドレス着なよ!!　原宿のラフォーレなら、きっとでっかいホールだよ。派手な方がいいに決まってるじゃん!!」
「えーーっ、でもさあ……」
わたしが困ってると、ママが助け舟を出してくれた。
「結婚式じゃないんだから、そんなおおげさにおしゃれしなくてもいいんじゃない」

「……ママはセンスが古いからなぁ……」

美奈は、自分の意見を却下されて、小声でブツブツ文句を言っていた。

主導権を握ったママが、黙々とごはんを食べている次女の理香に、さりげなく聞いた。

「そうだ。理香ちゃんにお洋服かしてもらえば？　理香ちゃん、いいお洋服いっぱい持ってるじゃない。ねぇ？」

理香は、本当に衣裳持ちで、しかも、大人っぽい服からかわいい服までバリエーション豊かにそろえている。だけど、家族の中で唯一デリケートな性格の持ち主で、無断で理香の洋服を着たのがバレると、怒るのを通りこして涙を流しながら抗議してくる。だから、洋服をかりるのは至難の業だし、何かお願いする時は、慎重に、ていねいに切り出さなければいけない。

末っ子というのは、こういう気配りをしながら、姉妹のバランスを考えているものなのだ。

わたしは、心の中でニヤッと微笑んだ。じつは、ママが助け舟を出してくれるのを待っていたのだ。

ママが味方についてくれれば百人力だ。

「ほら、ちーちゃん、理香ちゃんにちゃんとお願いし……」
「やだ」
ママの言葉を最後まで聞かず、理香はボソッとつぶやいた。
一瞬、お茶の間はシーーンと静まりかえった。空気が重い。
助けを求めるように、全員がいっせいにパパの顔を見た。
「ん？　おっ、なんだ、ごはんが冷めるぞ」
パパは、いつものん気だ。
かわいそうに、我が家で女4人が話しはじめると、パパの入るスキがなくなってしまう。
わたしが子供のころは「うちは女ばかりだから、まるで龍宮城だ」なんて喜んでたのに
……。
ふと、ママが、思い出したように、パパに詰め寄った。
「何か春っぽいお洋服買ってもいいわよねぇ。ちーちゃんのせっかくのイベントなんだから、新しいお洋服の方がいいでしょ。ねぇ、お父さん？」
「あ……ああ」
お財布がからむ話の時だけ意見を求められるパパ。気の毒だけど、それでも我が家の大

黒柱だ。
「まあ、いいんじゃないか。新しいの買えば」
鶴の一声が出た!!
「わーい、やったあ」
わたしたちは少しオーバーに拍手をして、パパに尊敬の意をあらわした。
とにかく、これで一件落着。
(ねぇ、ルパン!! ちさ、日曜日のイベントがんばるからね。見守っててね)
わたしは、勢いよくごはんをかっこみながら、声に出さず、つぶやいた。

3月8日、日曜日。
目が覚めた時には、もう緊張で手足が冷たかった。
ママが、今日のイベントのために買ってくれた、あわいピンク色のロングワンピースが、窓ぎわにひっそりと掛けられているのが、ベッドの中から見える。
わたしは、それを着てステージに立っている自分を想像してみた。
でも、すぐに、なんだか怖くなってきて、ベッドから飛び起きた。

朝11時に、原宿にあるファッションビルの6階、ラフォーレミュージアムに集合。そして、1時〜2時30分と、3時〜4時30分の2回、イベントのアシスタントをするのが、今日のわたしのお仕事だ。

結局、メイクはしなかった。

「若いんだから素顔でいいだろう」と、今朝の家族会議で決まったのだ。

でも、わたしは、ほのかに赤い色がつくグレープの香りのするリップスティックをかばんにしのばせた。

女の子のたしなみだ。これだけで、人前に出ても恥ずかしくないという、小さな自信が持てた。

わたしは、髪を金色に染めたバンド系の人や、アイドルのようにフリルがいっぱいついたスカートを着た女の子たちがひしめき合う竹下通りを『ルパン三世・パートⅢ』のオープニング曲を口ずさみながら歩いた。

〝デリシャスな勝利がオレを待っている〟という歌詞が、わたしを勇気づけてくれる。こ

の曲は、何かに立ち向かう時の、わたしの心のテーマソングだ。
(竹下通りを歌いながら歩いてててスカウトされたのは、本田美奈子ちゃんだったかなぁ。どのあたりでスカウトされたんだろう)
わたしは、気をまぎらせるために、なるべくイベントと無関係なことを考えようと努めた。
それでも、緊張感は容赦なくわたしの体を支配した。指先は冷たくなり、鼻の頭に脂汗がうっすらと浮かんだ。

集合20分前に、ラフォーレミュージアムに着いた。
階段のそばに、係の人らしき男の人がいた。
「……おはようございます。アーツビジョンの横山智佐です」
わたしが、おそるおそる名乗ると、その人は、
「あ、おはようございます。こちらへどうぞ」
と、素早く控え室へ連れて行ってくれた。
わたしは、秘密の隠れ家に案内されているような気持ちで、ドキドキした。

(もしかしたら、この部屋の奥には地下室につながる階段があって、そこでは何か危険な物質が造られていて、わたしは今日からその組織の一人で、もし秘密が守れない場合は抹殺か人体実験のモルモットにされて……)

わたしは、一瞬のうちにたくさんのことを想像して、これから始まる出来事に怯えた。でも、同時に期待もした。

現実と非現実がごちゃまぜになって、わたしの頭の中に、わたしはルパンの世界にいるんだ、という錯覚が生まれたのだ。

そして、この恐怖感はルパンの世界では大したことじゃない、いつも命を狙われてるルパンの恋人になりたいなら、このくらいで震えてちゃダメだ、ルパンに笑われちゃう、と思うと勇気が湧いてきた。

わたしの手は、少しだけ震えていたけれど、もはやそれは恐怖ではなく、武者震いだった。

わたしはギュッと拳を握り、

「おはようございま――す!!」

と元気に控え室へ入った。

本番前の控え室で、オーディションの時にお会いした北久保監督、音響監督の本田さん、それに、司会のミンキー♡ヤスさん、ビクターのスタッフの方にご挨拶をした。
「今日が本当に本当の初仕事なんです。よろしくお願いします」
わたしは、ド新人ですのでいろいろ教えて下さい、という気持ちを込めて、スタッフのみなさんに頭を下げた。
「こちらこそ」
「へえ、まったくはじめてのお仕事なの？」
「なんで？」
いっせいにスタッフの人たちが話しかけてきた。
「アフレコはまだしてないんです。イベントが先になっちゃったんです」
「へええ。きっと今日のお客さまは男の子ばっかりだけど、取って食ったりしないから大丈夫だよぉ」
「わはははは!!」
「ちさちゃんは、高校生なんだよね？」

「はい。昨日まで期末テストでした」
「おおおっ!!　なつかしい響きだ!!」
「昨日は何のテストだったの？」
「英語と日本史です」
「おおおっ!!」
「あのね、司会のヤスさんはね、こう見えても、もと国語教師だったんだよ!!」
「あぶねーーっ!!」
「えっ？　あぶないんですか？」
「そーだよお、ちさちゃん!!　あぶないんだよお」
「あはははははは!!」
みなさんは、まるで子供をあやすように、まだ右も左もわからないお仕事初体験のわたしと、とてもなごやかにお話しをしてくれた。
(ああ、みなさんいい人たちでよかった)
わたしは、少し安心した。ただ、解けきれない緊張に表情だけは固いままだった。

1時。
いざ本番!!
舞台へ……。

わたしは、司会のヤスさんの後について控え室を飛び出した。
スタートだ!!
今、始まった。
舞台に続く廊下を、わたしは走った。心の中で、ホップ・ステップ・ジャンプ！ とつぶやきながら。
ルパンへの道を、わたしは走りはじめたんだ。
舞台は、昼間なのに、眩しいほどライトが照らされ、光のかたまりに見える。
舞台までは5メートルほどの距離なのに、大きいのか小さいのかわからない。
わたしは、舞台へとかけ上がった。
お客さまがいっぱいだ。
わたしと同じ年くらいの男の子たち。

女の子も少しいる。
顔、顔。顔。
視線、視線、視線。
（きゃ――!!　みんな見てる――っ!!）
……ところが、緊張で頭がまっ白になって硬直してしまうかと思っていたのに、お客さまの拍手を浴びた瞬間、わたしはなんとも言えない喜びを感じたのだ。
ドキドキする。ワクワクする。
（これが、お仕事なんだ!!　ついに、ついに、わたしは念願のお仕事ができるんだ!!）
自己紹介をして、作品に対する意気込みを話して、何かのベスト10の発表をして、事前に回収しておいたQ&Aを読み上げた。
お客さまが笑うと、わたしもうれしくなった。客席の感動や興奮が肌からつたわってくる。
落ち着いて堂々と、というわけにはいかなかったけれど、ヤスさんに助けてもらいながら、一生懸命アシスタントをした。
イベントは、嵐のように進み、あっという間に終わった。

一瞬の夢の出来事みたいだった。
疲れた。でも、すごく心地いい……。
控え室に戻ると「お疲れさまでした!!」とスタッフのみなさんがニコニコ顔で迎えてくれた。
わたしは、ちっとも上手におしゃべりできなかったけれど、大人の男の人たちの温かい雰囲気の中で、なんだか無性にうれしかった。
少し大人になった気がした。
ミンキー♡ヤスさんが、わたしにさりげなく声をかけてくれた。
「わたし、今、東海ラジオで矢尾一樹くんとラジオ番組やってるから、今度遊びにおいでよ」
「は、はいっ!!」
わたしは、飛び上がるほどうれしかった。
ヘタなアシスタントだ、ってがっかりされてなくて良かった、としみじみ思った。
すると、そこへスタッフの方がニヤニヤしながらやって来た。

「男の子が来てますよ」
まるで内緒話をするように、その人は言った。
『勝田話法研究所』の友だちが来てくれたのかな、と思って、わたしはスタッフの方に案内してもらって舞台裏の階段ホールへ行った。
そこには、見知らぬ男の人がいた。
わたしと同い年か、わたしより少しお兄さんか、といった感じだ。
「サイン下さい」
突然、その男の人は色紙とペンを差し出した。
はじめて言われた〝サイン〟という言葉と、あまりに素早いその動きに、わたしは手品を目の前で見せられたようにボー然としてしまった。
いつの間にか、その色紙とペンを握って、わたしは黙りこくっていた。
「……あ、あの……サイン、ないんです」
わたしは、やっと口を開くことができた。
「…………」
男の人は、言葉を失ってとまどっていた。

しばらく、沈黙になった。
「じゃあ、普通に楷書で名前書いたら？」
スタッフの方が、困っているわたしを見て面白そうに言った。
「あ、そ、そうですねっ。それでいいですか？」
「は、はい……」
わたしと、はじめてのサインを求めてきた男の人の間の空気は、ぎこちなくてヘンだった。
そして、わたしが真剣に書いた漢字の名前サインは、もっとヘンだった。
立派な色紙に、味もそっけもない、みょうに角ばったわたしの名前が、全然合ってない。
わたしは、その色紙をやぶり捨てて、もう一度書き直したかった。
でも、それは人様のものでわたしの色紙ではないので、もうとり返しがつかない。
「…………」
3人で、黙って、ヘンになってしまった色紙を見つめた。
誰も、何もしゃべれず、じっと見ていた。
わたしは、真っ赤になりながら必死に謝った。

「あのっ、ごめんなさい!!　ヘンになっちゃいました!!　あの、書き直しましょうかっ!?」
替わりの色紙もないくせに、何が何だか、とにかく頭を下げた。
「いえ、ありがとうございました」
男の人は、色紙を手に取ると、礼儀正しくおじぎをして、階段を下りて行ってしまった。
わたしは、少し寒い舞台裏で、男の人の背中を見送った。
(サインを書いたんだ)
とてもサインとは言えないものになってしまったけれど、でもサインはサインだ。
急にうれしくなった。
だって、わたしにもサインを求めてくれる人ができたんだもの。
帰りの電車の中でちゃんとしたサインを考えよう。
わたしはしあわせな気持ちで、そう決意した。



ポニーキャニオンの人が原宿でミニ四駆のイベント用の
衣裳を選んでくれたの。体操のお姉さんみたいでしょ!!

ちさの想い出写真館



この洋服は『笑っていいとも』の〝杉平助の縁側対談〞
コーナーで着たの。――タミヤジャパンカップ東京にて。

ラジオに初挑戦



4月1日。

高校3年生になる直前の春休みを、週に2回、パン屋さんでアルバイトしながらボーーッと過ごしていた時、アーツビジョンからの電話が鳴った。

なんと、松田社長さんが直々にかけてきたのだ。

「ラジオ番組のアシスタントの話があって、ちさに決まるかもしれないんだけど……」

松田社長は、のんびりと言った。

わたしは、天井をつきやぶるほどびっくりして、大喜びで電話を切った。

次の日。

松田社長に連れられて、わたしは、ラジオ番組のスタッフの方に会いに行った。

赤坂のオフィスビル街をぬけ、少しさびしい感じのする建物の中へ、わたしたちは入った。

松田社長がドアをノックした。

するとすぐに

「あっ、どうも。ディレクターの穴倉(あなくら)です」

と、鼻の下にひげを生やした、丸顔の男の人がヌッとあらわれた。

なんだか怖そうな人だ。でも、目と声がやさしい。

わたしは、社長の後について、ふかふかのソファーにちょこんと腰掛けた。
ドキドキする。
ここは大人の世界だ。
(これからここで何の審査をされるんだろう……)
わたしは、助けを求めるように、となりに座っている松田社長をチラッと見た。
社長は、いつものののんびり笑顔をしている。
社長の笑顔を見ると、わたしは安心する。『ロボットカーニバル』のオーディションの時も、ずっと社長がスタジオにいてくれてオーディションに合格できたのだ。
わたしの中で、松田社長は〝ラッキーおじさん〟的な存在になっていた。
穴倉さんは向かい側のソファーに座ると、松田社長とわたしに、順番に名刺を差し出した。
「あ、ありがとうございます」
小さな声でお礼を言って、それを受け取った。
生まれてはじめてもらった名刺だ。
うすくて小さな紙なのに、とても立派で重要な物に思える。
わたしは、大人の世界に仲間入りした気分になった。名刺を持った指先が、急に成長し

ていくようなジワジワ感を感じた。
穴倉さんが、やさしい声で、聞いた。
「高校生、なんだよね？」
「はっ、はい。この春から3年生です」
「学校行きながら、声優やってるの？」
まるで面接が始まったみたいだ。
わたしは、自分がちゃんと話せているか不安だった。たまに、日本語がヘンになっている気がしたけど、シラけたムードをつくってはいけないと思い、必死に話を続けた。
「いえ、あの、まだ養成所に通ってるんです、声優の。それで、たまたま受けさせていただいた『ロボットカーニバル』というアニメのオーディションに受かって、デビューすることになったんですけど、まだお仕事はしてないんです」
「ああ、そうなの。それで、ヤスさんとはどこで会ったの？」
「……ヤスさん？」
「……ミンキー♡ヤスさん」
「あっ、ああ!! はい!! そのアニメの制作発表イベントで、一緒に司会をさせていただ

いたんです」
「へええ」
(そうか、ヤスさん、ラジオやってるって言ってたっけ。もしかしたら、ヤスさんが、わたしを紹介してくれたのかもしれない……)
そのあと、矢尾一樹さんとヤスさんがやっているラジオ番組のテープを聴かせていただいた。
矢尾一樹さんといえば、大人気のかっこいい声優さんだ。『勝田』の養成所のクラスメイトにも矢尾さんファンの女の子がいっぱいいる。矢尾さんの声は、アニメのヒーローのかっこいいセリフがよく似合うのだ。
その矢尾一樹さんのラジオ番組のアシスタントをさせてもらえるかもしれないなんて、これは、すごいことだ。
わたしは、真剣にテープを聴いた。
矢尾さんとヤスさんのおしゃべりは面白い。ハガキのコーナーも、わたしが中学生のころ夢中で聴いた深夜ラジオみたいで、思わず声に出して笑ってしまう。
「……おもしろいですね……」

わたしは、誰に言うでもなく、ポツリとつぶやいた。
「そうでしょう。ハガキもたくさんくるんだよ」
穴倉さんは、そう言うと、松田社長を見た。
「やれるかな?」
「どうかな?」
今度は、松田社長がわたしを見た。
「がんばります!!」
わたしは、勢いよく言った。このラジオ番組に出たくてたまらなかった。うまくできる自信はないけれど、どうしてもやってみたかった。
「じゃあ。やってもらおうか」
穴倉さんが、やさしく言った。
わたしは、びっくりして松田社長の顔を見た。
相変らず、社長はなごやかな表情をしている。何事もなかったかのようだ。
「がんばります!!」
わたしは、もう一度言った。

信じられない。
夢みたいなお話だ。
だけど、本当に、矢尾一樹さんのラジオ番組のアシスタントができるんだ。
わたしは、あまりにも突然に、そしてラッキーにラジオのお仕事を手に入れた。

第1回目のラジオの録音は、なんと、次の日だった。
集合時間より20分早く、11時40分に霞ケ関に着いた。
駅のそばの大きなビルの4階に、東海ラジオのオフィスがある。そのオフィスの中に録音スタジオがあるらしい。
わたしは、東海ラジオの入り口から、そっと中をのぞいた。
10人ぐらいのスタッフが灰色の机に向かっている。
誰も、わたしに気づかない。
わたしは、一番手前にいる人に、おずおずと声をかけた。
「おはようございます。あの……矢尾一樹さんのラジオ番組で……」
「……はい?」

男の人は、わたしを見ると、何か不思議そうな顔をした。
なんだこの小娘は、何しに来たんだ、と思われているような気がして、わたしは慌てて、昨日いただいた穴倉さんの名刺を見せた。
「あの……矢尾一樹さんの……」
「少しお待ち下さい」
男の人は、事務的にそう言うと、サッと奥の方へ消えた。
しばらくすると、女の人がやってきて、
「こちらへどうぞ。ここでお待ち下さい」
と、小さな会議室へ通してくれた。
わたしは、場ちがいなところへ来てしまったみたいで、急に自分の存在が恥ずかしくなった。
会議室には、ソファーとテレビが置いてある。
まだ誰も来ていないようだ。
わたしは、かばんを膝の上にのせて、すみっこに座った。
手持ちぶさただ。

壁にかけられた時計をずっと見ていた。針がなかなか進まない。
今、自分がどんな顔をしてるのか、見てみたい。きっと、緊張で赤らんで、ひきつってるにちがいない。
わたしは、だんだん心配になってきた。
12時5分になっても、まだ誰も来ない。
(ここでいいんだろうか……。場所がちがうんじゃないか……)
耳をすませて、会議室の外の音に気持ちを集中させた。
(わたし一人を置き去りにして、誰もいなくなってたらどうしよう……)
ラジオ番組の録音の場所がここでいいのか、誰かに聞いてみようと思ったけれど、会議室から出る勇気がなかった。
もし、「ここじゃない」と言われたら、どんな顔で帰ればいいか、わからない。
わたしは、誰かが来てくれることを祈りつつ硬直していた。
12時5分すぎに、突然、男の人の声がした。
「おはようございます──す」
昨日会った穴倉さんの声だ。

「ここです。ここにいますっ!!」
わたしは、叫んで飛び出したい気持ちを必死におさえた。
会議室のドアが開いた。
「おはようございます」
わたしは、立ち上がってしっかりと挨拶した。
「おはよう。あれ、何時に着いたの?」
「は、はい。10分くらい前です」
早く来すぎてはいけなかった、ととっさに思い、15分もさばよんで答えた。
「あっそう。早いねえ」
「す、すみません」
「あ、早いって言っても、もう5分すぎか。矢尾ちゃんは?」
「まだ、いらっしゃってないと思います」
「そう。じゃあ、ここで待ってて」
「はい」
穴倉さんは、忙しそうに出て行った。

ドアが開けっぱなしだったので、わたしは、オフィスの様子を見ていた。穴倉さんが、テープを片手に誰かと話している。
わたしは、少し心強い気持ちで、ソファーに座り直した。
少し遅れて、ミンキー♡ヤスさんも来た。
「おはようございます。どうも。ええ」
ヤスさんは、とても真面目でていねいな感じの人だ。
わたしは、ヤスさんに、イベントの時のお礼を言った。
「『ロボットカーニバル』のイベントでは、いろいろありがとうございました」
「あ、いえいえ、どうも。お元気でしたか？」
ヤスさんは、わたしのことを覚えていてくれた。ちょっぴりうれしい。
「あっ、そうだ。今日からラジオですよね？」
ヤスさんが聞いた。
「はいっ。よろしくお願いします」
「いえいえ、こちらこそ」
ヤスさんと話していると、入り口の方から大きな声が聞こえた。

「はよ――ございっす」
ついに、矢尾一樹さんが来たのだ。
会議室に、矢尾さんの顔がヌッとのぞいた。
かっこいい。
「お、おはようございます」
わたしは、ヤスさんの後について、立って挨拶をした。
「う――っす」
矢尾さんは、モデルさんみたいだ。背が高い。おしゃれだ。すごく派手なかっこうをしている。香水のにおいがする。高校のおしゃれなクラスメイトがつけてる香水と、全然ちがう。大人のにおいだ。
いつの間にか矢尾さんの後ろに立っていた穴倉さんが、ニヤニヤと言った。
「矢尾ちゃん、酒くさいよ」
「え、やっぱり、わかる?」
(そうか、お酒のにおいをかくすための香水なのか……)
わたしは、ドキドキしながら感心していた。

矢尾さんのマネージャーさんも来て、打ち合わせが始まった。
穴倉さんが、わたしを紹介してくれた。
「アシスタントをすることになった横山智佐ちゃんです」
「ど、どうぞよろしくお願いします」
「何？　ヤスさんがナンパしてきたの？」
矢尾さんが、かっこいい声で言った。
「いえいえ、ちょっとイベントで……」
ヤスさんと矢尾さんの会話は、打ち合わせの時から息がピッタリ合っていて、わたしは、どうやって二人の間に入ったらいいのか不安になった。
急に孤独を感じた。
(半年も一緒にラジオ番組をやっている二人に、急に面白くもないド新人が混ざったら、番組がつまらなくなっちゃうんじゃないか)
わたしは、今すぐここから逃げ出して、家に帰りたい衝動にかられた。
鼻の頭に脂汗をうかべて黙りこくっていると、矢尾さんが話しかけてくれた。

「学校では、何て呼ばれてるの？」
「はい。〝ちさ〟か〝ちーちゃん〟です」
「じゃ〝ちーちゃん〟って呼べばいいか」
「は、はい!!」
「高校生なんだって？」
「はい」
「おお――っ!! あれ、今日、学校は？」
「まだ春休みなので……」
わたしは、緊張のあまり、かばんからハンカチを出して、ギュッと握りながら返事をした。
ただ、救いなのは、どこに行っても「若いねえ」と驚かれることだ。なんだか、ちょっとだけその若さに甘えられる。
矢尾さんとヤスさんがハガキを読みながら、どんなコーナーをやって、いつわたしを番組に呼び込むか、相談を始めた。
わたしは、ただ横に座って、二人の様子をうかがっていた。
ビクターの方が来たので、挨拶をした。いつも録音に立ち合うスポンサーの方らしい。

わたしの頭の中は真っ白でボーッとしていたけれど、必死に名前と顔を覚えようとがんばった。松田社長も来た。だんだん本番の時間が近づいてくる。

1時間くらいして、いよいよスタジオへ入ることになった。録音が始まるのだ。

わたしは、矢尾さんのななめ向かい、ヤスさんのとなりの席に案内された。

ヤスさんが、みんなに台本を配った。最後に、わたしにもコピーをくれた。

3枚つづりのその台本には、最初のあいさつ、CM、ちーちゃん呼び込み、おハガキ紹介、M-①、CM、と簡単に番組の進行が書かれている。M-①というのは音楽のことらしい。どの曲をかけるか、スタジオの中で決めて、矢尾さんが台本にメモしていた。わたしも、マネしてメモをした。

(台本ってこういうものなのか……)

わたしは、どんなことをしゃべるのかがびっしり書いてある台本を想像していた。

ところが、実際は骨組みが書かれてあるだけで、あとはその場のノリでしゃべるのだ。

スタジオは、息苦しい。

緊張のせいか、うまく息ができない。
「ちーちゃん、どんどんおしゃべりしていいからね」
となりのミキサー室から、マイクを通して穴倉さんが言った。
「は、はい」
元気に返事はしたけれど、いったい何をおしゃべりしたらいいのか、さっぱり思いつかなかった。
わたしは、『ロボットカーニバル』のイベントの時のように、いざ本番が始まったら急に冷静になって、なんとかうまくやれるんじゃないか、と自分に期待した。
ところが、小さなスタジオの中で、心臓の音は壁に当たって反響しているかのように大きくなるばかりだ。
手のひらの汗も、拭いても拭いても溢れてくる。
耳までキ━━ンとしてきた。これまでに経験したことがないほどの、極度の緊張だ。
そこへ、突然、何かの警報装置が作動したかのような音がポ━━━ッと流れた。
脳波をいじられて、改造人間にされるみたいだ。
こわい。逃げ出したい。

20秒くらい、その音は続いた。すごく長く感じた。
ポーーーッが止まると、スタジオはシーーーンと静まり返った。
心臓が口から飛び出しそうだ。
わたしは、ハンカチを握りしめた。
その瞬間、とてつもなく大きな音で音楽が流れて、矢尾さんが「アニメ情報局ラジオマガジン」と叫んだ。
わたしは、体が浮かび上がるほどビクッと驚いた。
ヤスさんは親しげに、矢尾さんのお話に相槌を打っている。
もうわけがわからない。パニック状態だ。
さっそく、矢尾さんとヤスさんが、
「女の子がいないとさびしい、ということで……」
「どこでナンパしたの？」
「いやいや」
「なに!!　ロボットカーニバルのイベントでナンパした!?」
と、面白おかしくわたしを紹介してくれた。

「こんにちは、横山智佐です」
はじめて、スタジオのマイクの前でしゃべった。
わたしの声は、自分でもびっくりするほど固かった。とにかく、高くてかわいい声を出そうと必死にがんばった。
何が起こってるのか、何を話しているのかコントロールできずに、ただただ質問されたことにだけ答えた。
「最後まで楽しんで行ってもらいたいと思います」
「怖がらなくていいのよ」
子供をあやすようにやさしく、矢尾さんとヤスさんが言ってくれた。
気を使ってくれているのが、痛いほどわかる。
流れるように録音は進んだ。
矢尾さんが、おハガキを何枚か読んだ。
(テープで聞いた時と同じ声、同じ番組だ)
わたしは、不思議な感覚を味わっていた。
おハガキの後に矢尾さんが「ちーちゃんはどう? どう思う?」と質問してくれたけれ

ど、わたしは、ちっとも気のきいた答えができなかった。わたしのへたな返事にも、矢尾さんは、きれいにフォローしてくれた。

番組が進むにつれて、どんどんわたしは自信を失くして、さらに無口になっていった。二人のテンポをくずしているようで、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

番組の最後に、

「ぜひ、これに懲りずに……」

と、矢尾さんがふってくれた。

「はい、遊びに来させて下さい」

わたしがこう答えて、来週からも番組に居座る段取りになっていたのだ。

録音が終わった。

「すみません。うまくできなくて」

わたしは、スタッフのみなさんに謝った。

「来週からもう少ししゃべろうね」

穴倉さんに言われた。

矢尾さんにも、挨拶した。

「ありがとうございました。すみませんでした」
「いいのよ、いいのよ、ねえ」
矢尾さんは、気にしていないようだったけど、でも、本当は怒ってるかもしれない。
わたしはすごく不安になった。
何となく、みんなが怒ってるような、そんな空気がただよっていたのだ。

夕方、帰りの電車で、わたしは上手にしゃべれなかったくやしさと、それでもラジオに出演できた喜びをかみしめていた。
電車の中は、いつもと何も変わらない。
でも、わたしは今日、ラジオに出たのだ。
もちろん、電車の中の人は、誰もわたしのことなんか知らない。誰も、わたしが10分前までマイクの前にいたなんて、気づかない。
わたしは、大声で叫びたかった。
「今日、ちさ、ラジオに出たんだよ!! 矢尾さんっていう大スターと一緒に!!」
ぜんぜん上手にしゃべれなかったけど、矢尾さんが〝ちーちゃん〟と呼んでくれたこと

が、うれしくてたまらなかった。

2回目の録音は、2週間後だった。

午後3時にスタジオ入りだから、学校が終わってから行っても充分間に合ったけれど、わたしは、お昼で学校を早退して霞ケ関に向かった。

15分前になるまで、駅のそばの公園で1時間くらい緊張とたたかいながら、どうやって矢尾さんとヤスさんのおしゃべりの中に入っていくか考えた。

東海ラジオのオフィスでは、矢尾さんがハガキに目を通している間、何度もお手洗に行って、緊張でほてった頬に水をつけて冷やした。

今日も、〝わたしのラッキーおじさん〟松田社長は録音を見に来てくれた。

でも、やっぱり上手におしゃべりできなかった。

録音が終わってから、わたしは、社長にいっぱい怒られてしまった。

「おしゃべりの勉強をしなさい」「もっと自信を持ちなさい」

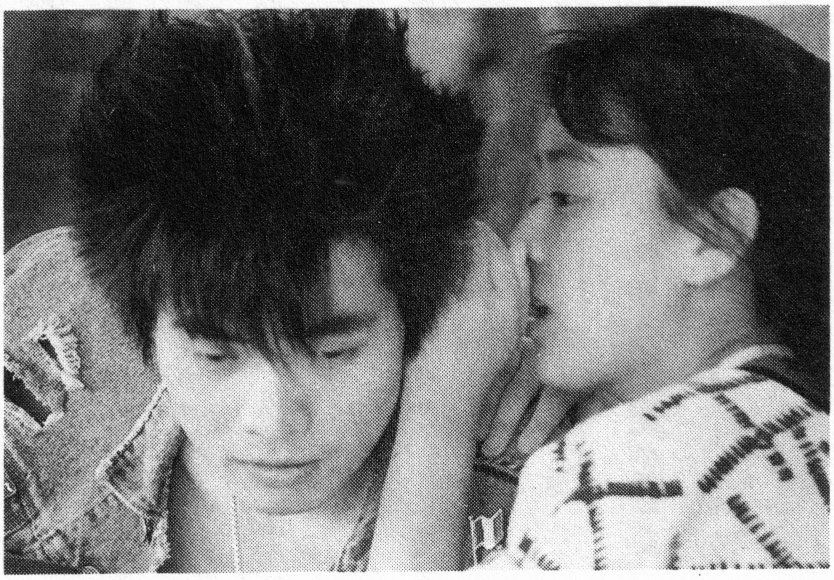
社長の言葉が、ぐるぐる頭の中でまわっていた。

ショックだった。

はじめて、いつもニコニコの社長に怒られたのだ。
矢尾さんも、あまり話をしてくれない。きらわれてるのかもしれない。
どうしよう。わたしは、泣きたくなった。

3回目、4回目の録音も、まだ固さがぬけなかった。
「もっと、友だちと話すみたいにお話しして」
穴倉ディレクターに注意された。
スタジオに入って、マイクの前に座ると、急に何をしゃべったらいいのかわからなくなってしまう。
大勢のお客様がいるイベントでは大丈夫だったのに、小さな密室のスタジオだと余計にあがってしまうのだ。
(もういやだ。行きたくない)
わたしは、毎週の録音が苦痛になってきた。
そして、6回目の録音の日。
わたしは、とにかく大きな声で元気に話すことだけを心がけた。

矢尾さんの質問にも、勢いで答えた。
「えっ」「あの」「ごめんなさい」はできるだけ言わないように、自分にくぎをさした。
明日、死んじゃうかもしれないんだから思い切りやろう、の精神で録音に臨(のぞ)んだのだ。
ラーメンの話が思いのほかもりあがって、わたしはいつもよりいっぱい本気で笑った。
「矢尾ちゃんと息が合ってきたね」
番組が終わったあと、はじめて穴倉ディレクターにほめられた。
「圧倒されるものがあった」
矢尾さんも、つけ加えて言ってくれた。
涙が出るほどうれしかった。
今日、新たな目標ができた。
もっとおしゃべりの勉強をして、自分の名前がタイトルについたラジオ番組を、いつか持ちたい。
帰りにみんなで寄ったお店で、穴倉さんが2杯、矢尾さんが3杯、ビールを飲んだ。
わたしは、ウーロン茶を飲みながら、よし来週もがんばるぞ、と希望に燃えた。
急に、ラジオのお仕事が楽しくなった。



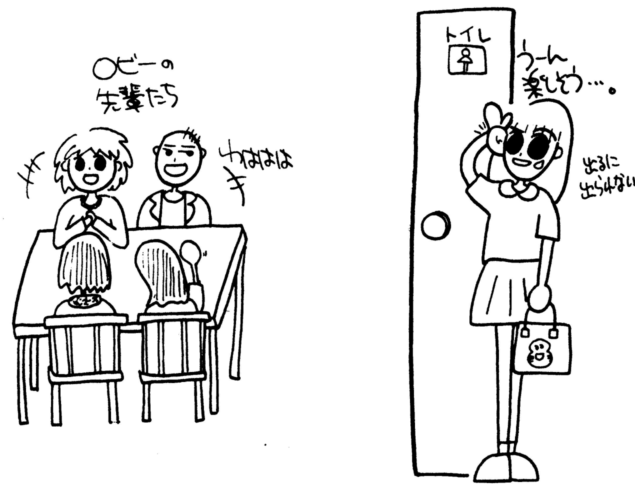
ファンの人からカミソリが来る？　と怯えてた矢尾一樹さんのビデオ“わがまま”の撮影。

ちさの想い出写真館



これもビデオの撮影中。カメラもマイクも矢尾さんも、すべてが怖かった高校３年生。

アニメデビュー



5月26日、火曜日が、わたしにとってはじめてのアニメのアフレコの日になった。
わたしは、ビデオアニメ『ブラックマジック・M-66』のヒロイン、フェリス役でアニメデビューするのだ。
じつは『ロボットカーニバル』の弥生役が最初に受かったオーディションで、制作発表イベントまで出演したのに、制作が遅れてしまってアフレコが延期されていた。
その間に『ロボットカーニバル』と同じ北久保監督、本田音響監督作品の『ブラックマジック・M-66』のお話が持ち上がった。
オーディションの後で、両監督が相談して、
「ブラックマジックのヒロインも、同じくらいの年齢のキャラクターだから、横山さんに合うんじゃないか」
ということになったらしいのだ。
だから、『ブラックマジック』のフェリス役はオーディションなしの監督推薦でいただいた。
(なんてラッキーなんだ!! これからも、こんなふうにお仕事が増えるといいな)
わたしは、心の中でぐふふと喜んだ。

ところが、小さなアクシデントが起こった。ちょうどアフレコの日が、矢尾一樹さんのアシスタントをしているラジオ番組の録音日と、ぶつかってしまったのだ。
わたしは、この日、朝10時から整音スタジオで『ブラックマジック』のアフレコをして、その後、午後4時から東海ラジオで『アニメ情報局ラジオマガジン』の録音に行って、それから、整音スタジオに戻って『ブラックマジック』の残りのセリフを録音することになった。
ラジオから戻ってきた時に、まだアフレコが終わっていなかったら、他の出演者の方と一緒にアフレコできるのだ。
わたしは、残念な気持ちと、でも少しホッとする気持ちを交互に感じた。
（はじめてアニメのアフレコをする記念日なのに、ふつうに参加できないなんて、がっかりだな……）
（だけど、ちさだけへたくそで、先輩たちから白い眼で見られるより、後から一人でアフレコする方がいいかもしれない……）
どっちがいいのか、わからない。いくら考えても答えは出なかった。

アフレコ当日。

平日なので、わたしは学校を休まなければならない。

学校を休んでお仕事に行くなんて、なんだかタレントさんみたいでかっこいい気がする。

(クラスの友だちはズル休みしてると思うかなぁ。まさか、アニメのアフレコをしているとは思うまい)

わたしは、今日の授業の様子を想像して、ちょっぴり優越感にひたった。

ママは、学校に行かないことを怒りもせず、逆に、火打ち石でもたたくかのような勢いで「がんばってらっしゃい!!」と玄関先で大声で見送ってくれた。

下町かあちゃんの気っ風のよさは、緊張ぎみのわたしを元気づけてくれる。

わたしは、よく晴れた青空の荒川土手を、自転車をかっ飛ばして駅に向かった。

朝のラッシュが終わりかけてる電車は、いつもの嵐のような通学電車とはまったくちがう静けさだった。

制服姿の学生は、ほとんどいない。

風景もちがって見える。

(はじめての録音日が、こんなにいいお天気でよかった)

わたしは、もし自分が高校野球のピッチャーで甲子園に出たら、初球は絶対にストライクを投げたい、と子供のころから思いつづけてきたのだ。
はじめの日は、まっすぐ、気持ちよくいきたい。
わたしは、晴れ晴れとした思いで、電車に揺られていた。絶対にストライクを投げようと思いながら……。

9時15分すぎに、新宿駅に着いた。
さっそく、南口にある整音スタジオを探した。
スタジオは、歩いて10分くらいですぐ見つかった。めずらしく、迷子にならなかった。
わたしは、早く着きすぎたと思って、スタジオのまわりを散歩した。
スタジオには15分前に入るぐらいがちょうどいい、と、ラジオ番組の録音に通っているうちに悟ったのだ。
早すぎると誰もいないし、待たせてくれるスタジオの方にも迷惑をかけてしまう。
だけど、そうは思っていても、気がせいて時計ばかり気になる。
小心者のわたしは、結局20分前にスタジオの入り口に立った。

力いっぱいドアを押すと、独特のにおいが流れてきた。
(これが、アニメのスタジオのにおいなんだ)
緊張感が、一気にやる気に変わった。『勝田』の稽古場のにおいにも少し似ている。
わたしは、この甘ずっぱいようなにおいを嗅ぐと、覇気がわくのだ。
地下に続く細い階段を、ゆっくりと下りた。
ゆっくり歩くのは、もうスタジオに来たくせにそれでも少し時間をかせごう、という思いと、誰かに会った時、最初にどうやって挨拶をするか、頭を整理して気持ちを落ちつけるためだ。
ゆるやかなカーブになっている階段の途中から、わたしはそっと顔だけ出してのぞいてみた。
4、5人の先輩たちが、スタジオのロビーでおしゃべりをしている。
わたしは、あわてて階段を下りた。
「お、おはようございます!!」
できるだけ元気に明るい声で挨拶をした。しょっぱなから、暗い新人が来た、と思われたくない。

「おはようございます」
先輩たちは、ていねいに、一度おしゃべりをやめて挨拶をかえしてくれた。
(プロの声優の先輩たちが、わたしに挨拶してくれたんだ……)
わたしは、プロの声優の仲間に入れたみたいで、うれしくなった。
でも、わたしには話し相手がいない。
先輩たちどうしは顔見知りだけど、わたしは新参者だ。誰も知っている人がいない。
ロビーには、あいている椅子があった。
でも、勝手に座ってはいけないような気がして、わたしはロビーの横に立っていた。
やることがない。どうしていたらいいのかわからない。
(ここでボーッと立っていると、暗い子だと思われちゃうかな。養成所の勝田先生が、地味な子は嫌われる、って言ってたから……)
あせる気持ちに追いたてられて、わたしは逃げるようにトイレへ入った。
(もう少し外で時間をつぶしてから来ればよかった)
雑談や、おはようございますの声が、ロビーから聞こえる。
どんどん人が増えてくるのがわかる。

ロビーで話している先輩たちの声は、みんな普通の声だ。
(どの声がどの役になるんだろう)
わたしは、ドキドキしながら耳をすました。
急に、台本を読みたくなった。
わたしは、かばんから台本を取り出した。
台本を開くと、手が小さく震えはじめたので、自分で自分の手にびっくりして、台本をかばんの中に戻した。
わたしはトイレを出て、またロビーのすみに立った。
ただひたすら、人が来るたびに、元気に挨拶をくり返しながら、10時になるのを待った。
「じゃあ、そろそろ始めましょうか」
本田音響監督のひと言で、みんながザワザワと、ロビーからスタジオの中へ移動した。
時計を見ると、10時5分だった。
わたしは、一番後ろについて入った。
スタジオは、なんだか薄暗い。マイクが3本立っている。赤いソファーが高級な雰囲気だ。

「おはようございます」
音響監督の本田さんが、スタジオに入ってきた。
「おはようございまーす」
みんな声を合わせて挨拶すると、バラバラと台本を開いた。
わたしも見よう見まねで、台本をめくってボールペンを手に取った。
「スタジオが混み合っててすみません。じゃあ、さっそくですが本直しを……」
本田さんは、そう言って、台本に書かれたセリフを変えはじめた。
「○カットの○○のセリフは、——じゃなく——に変更して下さい。それから○カット、○○のセリフは、——ではなく——です。○カットは欠番ですので、カットして下さい」
ものすごいスピードだ。
OFFとか、ONとか、カットとか、英単語が呪文のように並べられる。
わたしは、何が何やらわからず、となりの水島 裕さんの台本をのぞきこんで、同じように線を引いたりマークをつけたりした。
必死にペンを走らせながら、わたしは心の中で冷や汗を流していた。
(わたしの役、フェリスのセリフが変わったらどうしよう)

アフレコで先輩たちに迷惑をかけないように、わたしは、台本をほとんど丸暗記するまで読みつくしてきたのだ。

急にセリフが変わったら、とちってしまうにちがいない。

「え――、ロール分けですが……」

本田さんは、アフレコする段取りで、台本を6、7シーンに分けた。

これで本直しの作業が終わった。

わたしのセリフは、幸いほとんど変わらず、セリフを言いはじめる場面の指示が少しだけ出た。

そして、さっそくテストが始まった。

まず、最初から最後まで通してフィルムを見るのだ。

効果音が入っていない、無音のフィルムだ。

(これが、テレビで見るようなアニメになるんだ……)

わたしは、ドキドキしながら感動した。

使命感のようなものが、心に芽生えた。

(わたしも、子供たちに夢をあたえるアニメを作る一人なんだ)

フェリスのキャラクターが出てきた。
すごくかわいい。
こんなにかわいい女の子に、自分の声が合うのか、少し心配だ。
でも、精一杯がんばるしかない。
先輩たちがしているように、わたしは、台本に書いてある自分のセリフを小さな声でしゃべりながら、フェリスの口に合わせた。
台本を見てからしゃべるので、どうしても出遅れがちになってしまう。
早くしゃべらなくちゃいけないセリフは、(早)とマークを書きこんだ。
台本を見る、セリフを間違えずに言う、画面を見る、台本に注意を書きこむ、これをいっぺんにやるのだ。
頭の中は、混乱でぐちゃぐちゃだ。
自分のシーンが終わっても、わたしは、しばらくの間ページをめくることができなかった。
フェリスのセリフだけを、くり返し頭の中で練習した。
今見たばかりのフェリスの表情と、セリフの雰囲気が合うように、台本にフェリスの口

のイラストも描いた。

画面を見ていると、聞こえてくる先輩たちの声は、見事に絵と合っている。

効果音がなくても、じゅうぶんアニメの作品世界ができあがっている。

すごいプレッシャーだ。

わたしだけが、ド新人なのだ。

テストが終わると、5分くらいの短い休憩をとった。

わたしは、台本をにらみながら、ブツブツとセリフの練習を続けた。

何かしていないと、緊張とプレッシャーに押しつぶされてしまいそうだ。

すぐに、冒頭の1ロール目からテストが始まった。

はじめのシーンに、自分が声を当てるキャラクターのない人は、ロビーに出た。

スタジオが、急に広くなった。

いよいよマイクの前に立つのだ。

ボールペンを持つ右手が汗ばむ。台本を持つ左手が震える。

わたしは、勝田先生に教わったことを心の中で復唱した。

(新人なんだからへたで当たり前。うまくやろうと思わず、元気いっぱいやりなさい……)
もちろん、うまくやりたい。でも、へたなのはもうわかってるんだから、新鮮さで勝負するしかないのだ。
テストは、流れるように進む。
どんどんわたしの出番が近づいてくる。
わたしは、テストしているシーンのページを開きつつ、フェリスのセリフがあるページに人差し指をはさんで、あと何ページで自分の番がくるかを確かめていた。
シーンが進んでページをめくるたびに、心臓のドキドキ音が大きくなる。
(ああ、セリフ言いたくない。きっと、先輩たちにへただと思われる)
(でも、これは試練だ。ベテランさんにだって、新人の時はあったんだから)
(だけど、ベテランさんは、新人の時も上手だったかもしれない)
(だからって、今日をのりこえないと明日はないのだ)
(でもでも……)
二人のわたしが、胸の中で勝手に会話する。
このまま精神分裂してしまいそうだ。

人差し指の上のページが、3枚、2枚と減っていった。
ついに、わたしの、フェリスの出番だ。
わたしは、席を立って、マイクの前へと向かった。
「もうっ!!」
が、わたしの最初のセリフだ。
(力いっぱい、でもかわいく怒ろう)
台本を見ている余裕はない。台本を見ていると、映像はどんどん進んでしまって、セリフを言いそこなってしまう。
まばたきだってできない。目をつぶった瞬間に、セリフを言うはずのシーンが流れていってしまう。
わたしは、スクリーンを見つめたまま、ほとんど台本は見ずに、暗記したセリフをしゃべった。
なんとか、とちらずに絵に合わせてセリフを言えた。
全身汗でびっしょりになりながら、ホッと席に戻った。
膝がガクガク震える。まるで、長距離を走った後みたいだ。

ロールの区切りまでテストが終わると、後ろのブースにいた本田さんがスタジオの中に入ってきて、ダメ出しを始めた。
「○○のセリフは、もっとひそめて……。○○シーンは、もう少しふざけても大丈夫です」
わずか10分くらいの短いロールなのに、最初のシーンから順番に、ていねいにセリフのニュアンスが直されていく。
わたしは、どんな注意をされるのか、怯えながら本田さんの言葉を待った。
「えーーー、フェリスの、孫とおじいちゃんのシーンは……」
（つ、ついにきた!!）
「えーーー、はい、ま、そんな感じで……。えーーー、次の……」
（えっ!?）
わたしのシーンは、飛ばされた。
何の注意も出なかった。
本田さんは、もう次のシーンを直している。
わたしは、しばらく放心状態だった。
注意されなかったのは、うれしいことだ。でも素直に喜べない。

だって、はじめてアフレコをしたわたしに、悪いところがないわけがないのだ。
（見捨てられてたらどうしよう……）
本田さんは、結局わたしには何も注意せず、後ろのブースに戻った。
わたしは、モヤモヤした気分のまま、次のテストに臨（のぞ）んだ。
今度のテストは、ラストテスト、最後のテストだ。
（ここで失敗したら、本当にあきれられて、もう二度とお仕事できなくなってしまうかも……）
危機感がせまる。
わたしは、セリフをとちらないように、出番の寸前まで何度も台本を読みこんだ。
このセリフのときフェリスは少し遠くにいるから、遠くの人に話しかけるようにしゃべろう、と頭を整理してプランを練った。
でも、マイクの前に立つと、自分のプランどおりの声が出ない。プランどおりの演技もできない。
どんどん流れていくスクリーンの絵に、セリフを合わせるのが精一杯だ。
無我夢中でセリフをしゃべって、ラストテストもなんとかとちらずに終わった。

でも、わたしの不安は、どんどん大きくなる。
心臓は、ずっとドキドキしっぱなしだ。すごいスピードで、体中を大きな音が鳴り続けている。頭からつま先まで、全身が心臓になったみたいだ。
「じゃあ、次は本番で、お願いします」
本田さんが言った。
この瞬間、心臓がドンッと大きく動いて、手のひらにドッと汗がふき出した。
スクリーンのとなりの〝本番〟と書いてあるランプが、赤く光った。
空気が変わった。
テストまで静かだったスタジオが、さらに、耳の奥が痛くなるほどシーンとなった。
プールで泳いでいる時みたいに、自分の呼吸だけが、スーハーと異常に大きく聞こえてくる。
(次にしゃべるセリフが、アニメの中に入るんだ)
なんだか怖い。
失敗はできない。
もし、ヘンな声でヘンな演技をしてしまったら、それがビデオになって発売されて、わ

たしのデビュー作は、後悔のかたまりになってしまう。
初球はストライクを投げたいのだ。
録音は、順調に進む。わたしの出番が近づいてくる。
(そろそろマイクの前に行かなくちゃ)
わたしは、息を止めて静かに席を立った。
ちゃんと真っすぐ歩けるか、心配だ。
マイクまで、わずか5、6歩だ。
マイクの前に立った。
もうすぐ、フェリスが口を開く。
(最初のセリフは、もうっ!! とかわいく怒って……)
台本から目をはずして、マイクに口を向けると、突然、顔が震えだした。
止められない。恥ずかしい。どうしよう。
フェリスの口が開いた。
「もうっ!!」
(おおっ、声が出た。セリフがしゃべれた!!)

でも、何かおかしい。
テストまでと、絵がちがうみたいだ。
確かにテストの時と同じ絵のはずなのに、テストの時よりもうまくタイミングがつかめない。
まるでちがうアニメを見てるみたいだ。
マイクの前で、うまく呼吸できない。
さっきとリズムがちがう。
絵に合わせようとすればするほど、気がせいてしまって、今、どこのシーンをやっているのかわからなくなってしまう。
テストまでは、ほとんど台本を見ないでも大丈夫だったのに、本番では、台本から目が離せなくなってしまった。
フィルムは待ってくれない。
次々にフェリスの口が開く。
もう、セリフをどんなふうに言うか、なんて考えている余裕はなく、絵に引っぱられて勢いでセリフをしゃべった。

手のひらも、鼻の頭も、背中まで汗が流れている。
わたしは、とにかく尋常でない緊張の中でセリフを言い終わった。
息を止めて、静かに席に戻り、震える膝と顔を精神力をふりしぼって押さえた。
(ふ―――っ)
わたしは、心の中で大きくため息をついた。
本番が終わった。
「はい。ありがとうございました」
ブースの中から、本田さんが言った。
しばらく間があってから、
「では、頭の方からNGを……。○カットの○○のセリフ……」
と、本田さんが録り直しのシーンを告げた。
本田さんは、順番にNGの箇所を言って、納得いくまで何度も録り直した。
わたしは、死刑宣告を待つような気持ちで、フェリスのセリフを見つめながら、黙ってうつむいていた。
(どうぞ、NGになりませんように)

心の中で、ひたすら祈った。
(何事もなく、無事、このシーンが終わりますように)
「はい、以上です!!」
本田さんが、さわやかに言った。
(やった!!　ストライクが投げられた!!)
わたしは、フェリスの登場シーンのところを、クリアーしたのだ。
思わず顔がほころんだ。すると、その瞬間、一人の先輩がスッと立ち上がった。
「あの、フェリスのからみのところ、もう一回やらせてもらえないかな」
後ろのブースにいる本田さんに、先輩が振り返って言った。
(えっ!?)
わたしの体中の血の気が、一気に引いた。
「悪いけど、ちょっと、もう一回……」
(ちさのせいだ!!　ちさがへただから!!)
わたしは、急いで席を立ってマイクの前へ走った。
「す、すみません」

わたしは、何度も頭を下げた。

「いいの、いいの。ぼくがね……」

と先輩は言ってくれたけど、きっと、わたしみたいなへたっぴが相手で、やりにくかったにちがいない。

「すみません」

わたしは、もう一度謝って、台本を開いた。

「じゃあ、○カットから○カットまで」

本田さんの指示どおり、先輩とわたしは、セリフを録り直した。

考えてみたら、緊張のあまり、自分のセリフを絵に合わせることだけに集中していて、相手と会話をすることを忘れていた。会話をする余裕がなかったのだ。

他の人のセリフなんて、まったく耳に入ってこなかった。

結局、一連の会話シーンを全部やり直してOKが出た。

この後、わたしは『アニメ情報局ラジオマガジン』の録音のために東海ラジオに向かった。

ラジオ番組の収録を終え、アフレコのスタジオに戻った時には、他の出演者の方々は、もう誰もいなかった。
台本をかばんから出して、後ろのブースにいる本田さんやスタッフの方たちを、ガラスごしに見た。
ブースの中は、なごやかな雰囲気だ。
アフレコが終わるまでに戻れなかったわたしを、責める人はいなかった。
「向こうは、無事に終わりましたか？」
本田さんの声も、朝と同じ、やさしいままだ。
「はい。遅くなってしまってすみませんでした」
「いえいえ。じゃあ、あと少しですから、フェリス一人でやりにくいかもしれませんが、がんばって」
「はい!!　お願いします」
わたしは、やる気まんまんだ。しっかりやらなければ。
登場シーンのセリフは、もう録り終えていたので、残りは悲鳴のシーンばっかりだ。
フェリスが出てくるところまで、フィルムを早送りして、少しずつ録音していった。

もうわたし一人だけなので、失敗したらそのシーンだけくり返してやり直してくれた。
とてもていねいに、フェリスがおかれている状況説明もしてくれた。
(先輩たちのアフレコが終わっててよかった)
わたしは、心の底から思った。
もし、わたし一人じゃなかったら、こんなに時間をかけて、わたしだけに指導してくれなかったと思う。
悲鳴にだって、ひとつひとつ表情がある。小さな悲鳴や、心臓が止まるほどびっくりした悲鳴、走りながら叫ぶ悲鳴だってある。
本田さんに細かく演出をしてもらいながら、わたしは、新しい演技をどんどん吸収していった。
現場で覚える、っていうのは、きっとこういうことだ。
失敗しながら、だんだん上手になっていくんだ。
ストーリーの流れや、相手役との呼吸や、監督さんの演出によって、たくさんの演技があるんだ。
わたしは、NGを出さないように、絵に口を合わせることだけに必死になっていた。

だけど、NGを出していろいろなことを学んだ。
そうだ、わたしは新人なんだ。失敗を恐れていては何もできない。小さくまとまっては
いけないんだ。
わたしの中で、何かがはじけた。
最後のセリフのOKが出た瞬間、わたしは強烈に思った。
もっともっとお仕事がしたい。スタジオで勉強したい。この世界で生きていきたい。
もっともっと、うまくなりたい。



左がショッカーO野さん。まん中がミンキー♡ヤスさん。
この二人のおかげで今のちさがいるのです。感謝です。

ちさの想い出写真館



錦糸町 SEIBU 前の特設会場にて。『桃太郎伝説』のキーコの声を披露したり、台本プレゼントをしたんだよ。

バイト生活



高校を卒業した後の進路、これは大問題だった。

わたしは、なんとなく大学生になりたかった。女子大生とか、キャンパスライフという言葉のひびきにあこがれていたのだ。でも、高校3年生の夏、それをあきらめた。

理由はいくつかある。

ひとつは、準備が遅れたことだ。

わたしは、高校の演劇部や、『勝田声優学院』の授業にばかり夢中になっていて、大学選びをしていなかったのだ。

もともと、女子大生になりたいだけで、特に志望の大学はなかった。演劇の勉強ができる日本大学の芸術学部を受験しようか、と考えたけれど、どこに校舎があるのか、どんな授業を受けられるのか、くわしいことは何も知らなかった。

決定的な理由は、単なる学力不足だ。

1学期の中間テストの結果、わたしはクラスで8位の高ポイントを取った。

ところが、となりの1組は進学クラスと呼ばれ、頭がいい生徒の集まりだったけど、わたしの2組は対照的に、落ちこぼれクラスで、勉強もスポーツもぜんぜんがんばらなかった。ただ、1組よりもおしゃれに気を使う大人びた生徒が多かった。それだけが自慢のク

ラスだ。そんなクラスでたまたまいい順位を取っても、しょせん1組に行けばペケなのだ。
大学に行くか、声優になるか、わたしは悩んだ。
夏休み直前、わたしは失礼とは思いつつ、勝田先生に進路相談をした。
「ちさの場合、もうデビューしてるんだから、プロの声優としてやっていくには、学業との両立は難しいんじゃないか。仕事がたくさん入ってもっと忙しくなったら、大学なんて行けなくなるぞ」
勝田先生は、力強くおっしゃった。
向かいの机に座っていた経理の勝美さんも、
「大学も人生勉強としてはいいけれど、もったいないわよ。ちさはせっかくチャンスをつかんでるんだから」
と、やさしくアドバイスしてくれた。
「ちさは、何をやりたいの？」
勝美さんの質問は、するどかった。
わたしは、真剣に考えた。女子大生になりたい。キャンパスで友だちもつくりたい。でも、それよりもっともっと強い気持ちで、声優になりたい。

「声優になります」
わたしは、きっぱりと答えた。
「ちさは大丈夫だろう」
勝田先生にそう言われた瞬間、わたしは、プロの声優になる決心をした。
（ちさは、これから大活躍するんだ）
『勝田』出身の先輩、岡本麻弥さんのように。
高校在学中にオーディションに受かってデビューした麻弥さんは、わたしにとってあこがれの人だ。もちろん目標でもある。
（よし、声優への道1本でやるぞ!!）
わたしは、自分に言いきかせた。

「高校卒業したら、おこづかい1円もなしだからね。あんたも、お姉ちゃんみたいにアルバイトしなさい」
夏休みを過ぎたころから、これがママの口ぐせになっていた。

高校3年生当時、わたしのおこづかいはひと月4000円。週に1000円だ。友だちとくらべると、かなり少ない。

大学進学をあきらめたわたしは、勉強する必要がないので、ちょっとしたおこづかいかせぎに、地元のパン屋さんでアルバイトすることにした。

時給は500円。まあまあだ。

パンの値段を覚えなくちゃいけないのは大変だけど、はじめてのバイトにうきうき気分だった。

生きていることすべてが勉強になる。

アルバイトしながらも、わたしは、人の観察をした。

お店の自動ドアが開いた瞬間「いらっしゃいませ」と大きな声で言われて、恥ずかしそうにしている女の人。

パンつかみがうまく使えず、3回もパンを取り落としたあげく、手づかみでトレーにのせたおじさん。

レジの前に行列ができているのに、お客さまに一万円札を出されて、あわてておつりの千円札を数えるわたし。

もし、お客や店員の役をもらったら、きっとこの状況は使える。絶対にうまく演じられるにちがいない。

それから、わたしは、かわいい声を出す特訓もした。

「いらっしゃいませ、ありがとうございました」をできるだけかわいく、大きな声で言うのだ。

わたしは、自分の声は低くてかわいくない、とコンプレックスを持っていた。だから、何かしゃべる時は細心の注意をはらって、高くかわいく声を出すように気をつけていたのだ。

ある日、わたしがバイトしてるところへ、ママがパンを買いにきた。

わたしは、いつものように「いらっしゃいませ」をいかにかわいく言うかに集中していて、ママが入ってきたことに気づかなかった。

レジにいるわたしの前に、トレーがポンと置かれたとき、わたしははじめてママと目が合ってゲッ、と思った。

ママは、ニヤニヤしながら言った。

「ちーちゃん、がんばってるわね!!」

「……あ、うん」

「いらっしゃいませ、ってすごいかわいい声がしたから誰かと思ったら。ちーちゃん、家にいる時と1オクターブ声がちがうんじゃない？　うふふ。じゃあ、がんばってね」

ママは、わたしを励ましたふりをして、しっかりひやかして帰って行った。

一緒にバイトしてるおばさんが、くっくっと笑いをこらえている。

顔から炎がふき出るほど恥ずかしかった。

結局、パン屋さんのバイトは半年くらいでやめた。

閉店後にケーキがもらえるわけでもなく、いつも同じコロッケパンや焼きそばパンしか持って帰れなくて、だんだんつまらなくなってしまったのだ。

高校を卒業した。

『勝田声優学院』では、4月からゼミ科に進級することになった。わたしは、野沢雅子先生と、水島鐵夫先生のゼミクラスに参加した。

週に2日、『勝田』の稽古に通う以外、やることはない。

アーツビジョンからは、ほとんど連絡がこない。

頑固でしっかり者の下町ママは、さんざん言っていたとおり、1円たりともおこづかいをくれなかった。

わたしのお仕事は、今のところ『週刊少年ジャンプ』の読者ページ『ジャンプ放送局』のアシスタントだけだ。

わたしは、アルバイトをすることにした。

ただ、今度は、バイトをすることに恐怖心が生まれていた。

バイト生活が長く続くと、心がすさんでくる、とか、いつの間にかバイトの方が本業になってしまう、という怖いうわさを聞いていたからだ。

(バイト生活にひたって心が溶けて、目標を失くしたズルズル人間になってしまう)

わたしは、アルバイトにそんなイメージを抱いていた。

そこで、わたしは、なるべく時給のいいバイトを探した。

働く時間を少なくして、自分の自由時間を増やして、プロの声優としてやっていくための勉強をしたかったのだ。

アルバイトは、慎重に選んだ。

おかげでわたしは、すっかりバイト誌の読み方が上手になった。

まず、バイト誌は発売当日の朝に買う。
発売後2日もたっていると、せっかくいいバイトを見つけても、電話をかけるともう定員オーバーだと断られる可能性が高い。
それから、いいバイトがあっても、1週間じっとがまんして、次の週に同じバイト誌を買う。もし、またそのバイトの募集が載っていたら、それは人気のないバイトということになる。きっと働く条件が悪い、と判断してきっぱりやめる。
つまり、最初の週のバイト誌はおとりで、次の週のバイト誌の中から、最初の週のバイト誌になかったいい仕事を選ぶのだ。
こうすると、悪いバイトが消去法で消されていって、残るいいバイトは数が少なくなる。しぼり込まれた中から、できるだけいいバイトを探すのは簡単だ。
これを1カ月もくり返せば、だんだんバイト探しのコツがわかってくる。
バイトする場所は、電車やバス1本で、30分以内に通えるところにする。
通うのに長時間かかると疲れるし、時間ももったいない。これは、ラッシュの電車でチカンのおやじと闘いながら、1時間かけて通学していた高校時代の3年間の経験で痛感した。

そして、時給700円以上のところを探す。
これで完璧だ。
こうして、わたしは、浅草のアイスクリーム屋さんのバイトを見つけた。
どうせバイトするなら大好きな甘いもののお店がいいや、と思ったのだ。
時給は700円。お店を開ける朝10時30分から、夕方のバイトの人が来る4時ごろまで、週の半分くらい働いた。
朝のバイトの人は、ほとんど女子大生で、みんなおっとりしていてやさしかった。アイスにいろんな果物のフレーバーをごちゃまぜに入れて、こっそり試食させてくれたりした。
店長さんは、わたしを信頼してくれて、すぐにお店の鍵をあずけてくれた。
このアイスクリーム屋さんは、手焼きのワッフルコーンが自慢だ。コーンを焼くと、手や洋服や髪の毛にも甘い香りがついて、しあわせ気分になれる。
お昼は、必ずミスタードーナツで食べた。スクラッチカードのポイントを集めて、ミスターグッズをもらうのに燃えていたのだ。
わたしは、早くお金をためて、ズルズル人間になる前にバイト生活をやめたかった。

そこで、短期で効率のいいバイトを他にもすることにした。
アルバイト誌で、ポスター貼りのバイトを見つけた。
時給は１０００円。破格だ。中野周辺に、ただポスターを貼るだけの仕事だ。
ところが、簡単だと思ったのは大間違いだった。いちいち家やお店の人に「すみません、ポスターを貼らせて下さい」と声をかけなければいけないのだ。ＯＫがもらえればいいのだけれど、５件に４件は断られる。「何のポスター？　困るのよねぇ」とあからさまに嫌な顔をされたり「あ、うちはダメよ」と門前払いされたりもした。
これは、心がすさんでしまう。心どころか顔つきまで悪くなってしまいそうだ。
わたしは、怖くなって、１回だけでポスター貼りをやめた。
同じく時給１０００円で、チラシ配りのバイトもした。
朝７時から、東京駅の出口で、パン教室のカラフルできれいなチラシを配った。早起きはつらいけど、チラシがきれいなので、通勤のＯＬさんはサッと持って行ってくれた。
早朝のバイトはお金がいい、と悟ったわたしは、アイスクリーム屋さんのバイトの前に、ファストフードのバイトもした。

スマイル0円のお姉さんは、誰もが一度はあこがれるものだ。わたしも、笑顔でポテトを勧めてみたい、と思っていた。

ところが、朝6時30分から9時までの、たった2時間半でも、お店を開けるセッティングや掃除は重労働で、しかも出勤前のおじさんたちがひっきりなしにやってきて、低血圧のわたしには厳しいバイトだった。

だんだん早起きが面倒になってきて、バイトをさぼりまくってしまって、結局やめた。

朝のバイトはきついので、夜のバイトを探した。

久々にアルバイト誌を買うと、銀座のレストラン・時給1000円がひときわ輝いていた。こんないいバイトは他にはない、と思いすぐ申し込んだ。

地下にあるレストランは、なんだかあやしげなお店だった。テレビで見るスナックとか、バーとかクラブみたいな雰囲気だ。フロアにはルーレットが置いてある。

わたしは、大人びた空間に、ちょっとびびった。

だけど仕事は、メニューをきいて食事を運んだり、テーブルをセッティングしたり、と簡単だった。ホステスさんのように、席についてお酒をつくることもなかった。

わたしは、ルーレットのルールを覚えて、ディーラーとして球を回すこともできるよう

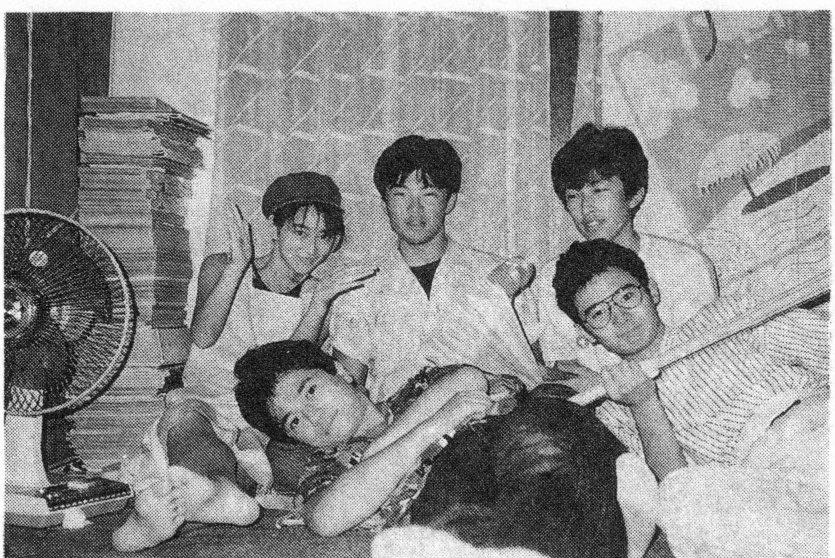
になった。
時給はいいし、仕事も楽しかった。
ただ、水商売の一歩手前のようなあやしい店がまえに、下町ちゃきちゃき娘のわたしは、どうも合わなかった。
わたしの中で、抵抗感がだんだんふくらんでいった。
いつまでもこんなところにいてはいけないんじゃないか、と不安になってきて、3カ月でやめてしまった。

こうして、わたしのバイト生活は、約1年つづいた。
たくさんのバイトを経験したけれど、わたしはいつも、プロの声優として活躍するという夢を、心のど真中で持っていた。
バイトの日々に疑問を感じながら、わたしは、夢を見つめてがんばった。
夜、ベッドの中で神様にお祈りした。
こんなバイト生活も、いつか笑って話せるようになれますように……。



高校３年生の時、体育祭で。わが演劇部はクラブ対抗リレーに“欽ちゃんの仮装大賞”状態で臨みました。

ちさの想い出写真館



ちさのとなりは森川智之くん。手前にいるのは陶山くん。『勝田』の仲間の家をたまり場にして遊びまくってたの。

VPというお仕事



ビデオアニメのオーディションに受かって、順調にデビューすることができたわたしは、このまま勢いにのって、プロの声優として活躍するつもりになっていた。
高校を卒業して、どんどんお仕事が入って、大忙しになって、声優のお友だちもできて……華やかな将来を空想して、なかなか寝つけない日さえあった。
わたしは、ルパンにあこがれる空想好きな下町娘なのだ。
ところが、現実は、そう簡単に下町娘をシンデレラにしてくれなかった。
『ブラックマジック・M-66』のアフレコが終わったころから、アーツビジョンからの連絡がめっきり減ったのだ。
わたしは、アニメに出たくてたまらなかった。
せっかく『ブラックマジック』でアフレコを初体験して、アニメに声を当てるコツをつかみ始めたのだ。今のうちにたくさんお仕事をして、軌道にのりたい。アニメのリズムを覚えたい。
わたしは、アーツビジョンからオーディションの連絡がくることを、ただひたすら待った。
アニメに出るためには、まずオーディションを受けて、役をとらなければいけない。つ

まり、アーツビジョンから連絡がこないことには、アニメに出るチャンスがないのだ。
学校から帰って、家でゴロゴロしていても、電話の音ばかり気になった。
けれど、待てど暮らせど電話は鳴らない。
やっとかかってきた、と思って、メモとえんぴつを握りしめて受話器をとると「矢尾一樹さんのラジオの録音日ですけど……」と事務的なスケジュールの伝言だけだった。
（どうしてオーディションのお話、こないんだろう）
電話を待ちつづけて1カ月ほどたったころから、だんだん不安になってきた。
（もしかして『ブラックマジック』のアフレコで、この子はまだまだダメだ、って思われちゃったのかな……）
アーツビジョンに電話して、なぜオーディションがないのか、『ブラックマジック』の時のわたしの評判が悪かったのか、何度も聞こうと思った。
でも、実力もないド新人のわたしがなにか質問したら、生意気な子だと思われて、余計にオーディションのお話がこなくなっちゃうかもしれない。
うじうじ悩んでいるだけで、こちらから電話をかける勇気は、どうしても出てこなかった。

養成所に入りたてのころは、勝田先生が怖くてたまらなかったけど、今はアーツビジョンの方がおそろしい存在だ。わたしの将来は、アーツビジョンにあずけているようなものなのだから、嫌われたらおしまいだ。
(もういいや!!)
開き直ろうと思った。あきらめてしまえば、気持ちが軽くなる。明るくなれる。
でも、ここまできて、夢をすてるなんてできなかった。
だって、わたしにはもう、声優への道しかないのだ。そう心に決めたのだ。
プロの声優として活躍すれば、勝田先生や、いつも陰で力になってくれてるママも喜んでくれるだろう。
(早くお仕事がしたい)
あせる気持ちは止められなかった。
不安が心を支配した。
高校生の間は、まだよかった。
学校のテストや行事で、やることがたくさんあったし、友だちとおしゃべりしてると気

がまぎれた。

そのころの話題は、彼氏の話か、覚えたての洋服のブランド話だった。

彼氏のいないわたしは、友だちののろけを聞いててもケッていう気分だったけど、洋服には興味があった。

みんな『non-no』や『an an』を読んで、にわか知識をつめこみ、自慢げに話した。わたしには好都合なことに姉がいるので、姉が買ってきた『MORE』をぬすみ読みして、みんなより大人の気分を味わっていた。

人気のブランドは、I. S. や、PERSON'S や NICOLE だ。

「ほら、コムサ（コムサ・デ・モード）の黒いジャケットもらったの!!」と大はしゃぎしてる、かわいくてミーハーなクラスメイトの女の子に対抗して「ちさ、ミチコ（MICHIKO-LONDON）のトレーナー買ったよ!!」と、学校をさぼってバーゲンに行って買った白いトレーナーを、わざわざブランドのロゴ付き袋に入れたまま見せたりした。

学校ではしゃいでいる時は、オーディションのことを忘れていられた。

ところが、高校を卒業すると、やることがなくなってしまった。

電車で私立校に通っていたわたしは、近所に話し相手になってくれる友だちがいなかっ

た。

大げさでなく、すべてを失ってしまった気分だ。

退屈な時間がたくさんできた。

週に2回『勝田声優学院』に通い、週に1回、アーツビジョンの養成所『日本ナレーション研究所』に通い、『ジャンプ放送局』のコラムを書いて、あとは、仕方がないのでアルバイトに気持ちを集中させた。

もちろん、お芝居を観に行って感性を磨いたり、野沢雅子先生のレッスンに備えて滑舌(かつぜつ)の練習をしたり、プロの声優になるための勉強はしっかりやった。

お風呂では〝*外郎売り(ういろううり)〟ではきはきしゃべる練習をした。寝る前の30分は〝滑舌の特訓の時間〟と決めて、眠くて重たくなった口を必死に動かした。

でも、勉強すればするほど、オーディションのチャンスがないのが虚しい。

(こんなに努力してるのに、報われる日はくるんだろうか……)

夜はとくに、やりきれなくて悲しくなった。

落ち込みがどん底に達した4月中旬、本当に久しぶりにアーツビジョンからオーディションの連絡がきた。

「横山さんに、VPのオーディションをお願いします」
デスクの女の人が、てきぱきと言った。
長いトンネルからぬけたように、目の前がパッと明るくなった。
「はっ、はい!!」
「受かると、3泊ぐらいのロケがあるんですが、泊まりは大丈夫ですか?」
「えっ、ロケですか?」
「ええ、VPですから。あの、泊まりの方は……」
「あ、はい、大丈夫です!!」
「じゃあ、○日の○時から、場所は――で、VPのオーディションです。お願いします」
「はい!! ありがとうございました!!」
わたしは、日にちと時間をメモすると、うきうきと受話器を置いた。
メモした紙を、胸に抱きしめた。さっきまでただの白い紙だったのに、今は壱万円札よりもいとおしい。
VPとは何なのか、何の略なのかよくわからないけど、とにかくオーディションだ。
(どうかオーディションに受かりますように)

わたしは、毎晩の滑舌の特訓の後に、クリスチャンのように神様に祈った。

オーディションは簡単だった。

スタッフの人たちの前で、自己紹介をして、短いセリフを読んで、「体力はありますか？今までに撮影の仕事をしたことがありますか？」などの質問に答えた。

お仕事をしたい、という執念がスタッフの人たちに届いたのか、わたしは、このオーディションに合格した。

『勝田』の同期で、ものすごく仲良しの森川智之くんも合格して、一緒にVPに出られることになった。パートナーが森川くんなら心強い。泊まりがあるロケだって、旅行に行くような気分でリラックスできる。まさに、二重の喜びだ。

ロケは、3泊4日で、岩手県に行った。

男ばかりのスタッフさんと一緒に、小さなワゴン車につめこまれて、岩手まで延々と高速道路を走った。

車の規則正しい揺れに、気持ちよくなってうとうとしても、体が痛くてすぐ目が覚めてしまう。パーキングが待ちどおしい。

朝8時に東京を出て、岩手に着いたのは、もう陽が沈みかけたころだった。
この日は撮影はしないで、下見をかねて農協の工場見学をした。
民宿のようなホテルに泊まった。
2日目は、朝5時起きで撮影をした。牛小屋で牛にさわったり、ふんをひっかけられそうになったり、森川くんと遊びながら撮影が進んだ。
なぜか、トライアスロンの格好をして、山道の急な坂を自転車で登ったりもした。どんなストーリーのビデオができあがるのか、さっぱり想像がつかなかったけど、スタッフの人たちが親切で、撮影は楽しかった。
最終日は、工場で牛乳づくりの過程を見ながら感心しているシーンを撮った。
教育番組の、社会科のお姉さんになったみたいだ。
「このビデオは、どこで見られるんですか?」
わたしは、すっかり仲良くなったスタッフの人に聞いてみた。
「ああ、これはね、一般の人は見られないんだよ」
「えーっ!!　そうなんですか?　どうして?」
「だって、VPだからね」

わたしは、VPが何なのか、撮影の監督さんに教えてもらった。
オーディションの連絡を受けた時も、アーツビジョンの人はVPと言っていた。
（そういえば、VPって何だろう？）
どうやら、VPとはビデオ・パッケージのことで、会社の社員教育用として製作されて、社内で社員さんだけが研修のために見る場合が多いらしい。だから、一般の人の目にふれることは、まずないのだそうだ。
（せっかくビデオに出演したのに、自分で見られないなんて……）
ちょっぴりがっかりした。
でも、何事も勉強だ。
カメラの前でも、マイクの前でも、演技するということに変わりはないのだ。
わたしは、VPのお仕事を無事に終えて、ひとまわり成長したような気分で岩手から帰った。

このロケを境に、撮影のお仕事のオーディションが一気に増えた。
わたしは、2回に1回の割合で合格していた。大勢がオーディションを受けるのだから、

かなり高い確率で合格していたことになる。

オーディションに受かる、ということは、わたしにとって、三度の飯よりうれしかった。オーディションに受かれば、アーツビジョンも喜んでくれるだろう。横山智佐はオーディションに行くと必ず受かる、というような好印象を持ってもらえれば、きっと、もっとどんどんわたしにお仕事のチャンスをくれるだろう。

なんたって、養成所にはたくさんの声優予備軍がいる。みんなプロの声優になるチャンスを待っているのだ。

アーツビジョンのマネージャーさんや、スケジュール管理をしているデスクの人に、わたしの存在をアピールして気にとめてもらわなければ、いつまでも予備軍のままだ。とくにわたしの場合、ビデオアニメでもうデビューしているのだ。このまま足ぶみしているなんて恥ずかしい。

(予備軍の中で、一番になってみせる!!)

わたしは、固く心に誓って、撮影のお仕事のオーディションに臨(のぞ)んだ。

渋谷の駅についてる巨大テレビのお仕事をした。『つるの恩返し』と『舌切りすずめ』のパロディー物語を撮影したのだ。

わたしは、おつうの役に抜擢(ばってき)された。着物を着て鶴のように舞うシーンが、難しかった。だけど、岩手ロケのビデオとちがって、渋谷駅で待ち合わせしてる人たちや、通勤・通学の人たちにも見てもらえるのがうれしい。芸能人になった気分だ。

それから、郵政省の関係の撮影もした。展示場のモデルハウスを使って、生活設計についてのビデオを撮った。空き時間には、他の出演者の人たちと「こんな家に住みたいね」と語り合いながらお茶を飲んでいた。

駿府(すんぷ)博覧会のロケで、静岡県にも行った。白糸の滝で虹を見たり、茶摘みをしたり、いろいろな体験ができた。

ケーブルTVのお仕事もした。横浜の元町で、有名なレースのお店や、靴やバッグのお店の店長さんに、人気の秘密を質問した。わたしよりはるかに年配のおじさんたちに、カメラの前でリラックスしてもらうのも、わたしのお仕事だ。気分はもうTVレポーターだ。

撮影のお仕事は楽しい。行ったことのない地方に行けて、たくさんの人に会える。新しい発見がある。何にでも挑戦してみたい挑戦好きなわたしの性格に、ぴったりのお仕事だ……と思っていた。

ところが、ホテルの従業員教育用VPの撮影の時、小さな事件が起こった。

横浜中華街の中にある大きなホテルの中で、その撮影は行われた。
わたしは、ホテルの制服をピシッと着て、ホテル従業員になりきっていた。
だけど、下町のふつうの家庭に育ったわたしは、こんな立派なホテルに泊まったことがなく、ホテルの従業員がどういうふうに振るまうものなのか、まったくわからなかった。
でも、わたしは、ホテルの従業員をビデオで教育する役なのだから、従業員の模範としてお手本を示さなくてはならない。
おじぎの仕方や、廊下の歩き方など、監督さんにひとつひとつやり方を聞きながら、撮影していった。
撮影は順調に進んでいた。
ところが、わたしたち撮影隊は、突然、そのホテルで実際に働いている従業員さんにストップをかけられた。
「許可をとって撮影しているのか」とか「お客さまから苦情が出ている」とか怒られたあげく、「ちょっと話してくるだけだから」と言い残して、監督さんを別の部屋へ連れていってしまった。
わたしは、残りのスタッフの人たちと、ロビーのすみで監督さんを待った。

「おめえらのためのビデオ撮ってるんだろうがよ!!」
スタッフの人が、息を荒くして憤慨している。わたしも、スタッフさんとの仲間意識から一緒になってムッとしていた。
わたしたち撮影隊は、注意しにきたホテルの従業員に、ぞんざいに扱われたのだ。
ジーンズに、ボロボロに着古したトレーナー、服のあちこちにガムテープをつけた、いかにも撮影の仕事をしています、というスタッフさんの格好が「このホテルにふさわしくない」と目で訴えられたかのようだった。
けれど、時間がたつにつれて、だんだん悲しくなってきた。
(もしこれが、有名人の撮影だったら、こんなふうに怒られないのかもしれない)
撮影機材に目を止めて「何の撮影かしらね」とヒソヒソ話しながらわたしの前を通りすぎるホテルのお客さんを見ていて、ふと思った。
それより何より、時間が心配だ。
わたしは、このVPの撮影の後に、たったひとつレギュラーでやっている『ジャンプ放送局』のお仕事があって、夕方5時までにはお茶ノ水駅に着かなくてはいけなかった。
わたしの大切なお仕事だ。遅刻して、この子はやる気あるのか、なんて思われたくない。

あせったわたしは、待ち時間を利用して、アーツビジョンに電話をかけた。
「今、撮影が中断していて、ジャンプ放送局までに全部撮り終わらなかったらどうしたらいいでしょうか!?」
わたしは、興奮して一気にまくしたてた。電話に出たデスクの人は、
「3時半までには、そちらを出させてもらうように話してありますので、大丈夫ですよ」
と、わたしを安心させてくれた。
結局、撮影は再開したけれど、すぐに3時半になってしまった。
「横山さん、もう出ないといけないんですよね?」
「もう少し……残れないですよね?」
スタッフの人たちにお願いするように言われて、心が痛んだ。
「すみません。ごめんなさい。失礼します」
わたしは、一人一人に頭を下げて、急いでホテルを出た。
『ジャンプ放送局』のお仕事をしている間もずっと、わたしが帰った後の撮影のことが気になっていた。
(撮影は順調に進んでるかなぁ。残りの撮影は、いつやるんだろう?)

わたしは、ベッドに入って寝つくまで、スタッフの人たちの顔を思い浮かべながら、撮影の心配をしていた。

わたしの心配とはうらはらに、その後、アーツビジョンからはホテルの従業員VPに関しての連絡はこなかった。

不安になったわたしは、自分から事務所に電話をしてみた。

「おはようございます。横山智佐です。あの、ホテルのVPの撮影なんですけど、じつは、撮影が中断して時間が足りなくて……」

わたしは、横浜のホテルでのいきさつを、ていねいに説明した。すると、電話に出たデスクの人は、なんでもないことのように言った。

「ああ、あのVPは、代わりに別の人が行きました。横山さんの都合がつかなかったので」

「ええ――っ!?」

(……別の人？)

ショックだった。

わたしは、ボロボロに傷ついた。

だって、あのホテル従業員の役は、わたしがもらったわたしの役だったのだ。
(わたしの役だと思ってたのに、わたしじゃなくても、誰でもよかったの？)
そんなことは、信じたくない。スタッフの人たちだって、わたしが3時半に帰った時、残念そうにしていた。わたしたちは、同じ撮影隊の同じ作品をつくる仲間だったのだ。
(なのに、どうして？)
わたしは、悲しい気持ちを軽くしたくて、養成所の友だちに、この出来事を話した。
「あれ、オレ、手だけしか撮らなかった、っていうVPの話、知ってるよ」
「歯をみがいただけで、セリフがなかったって話も聞いたことあるよ」
「頭下げて、おじぎするだけ、とかね」
わたしは、次から次へと出てくる体験談に驚いた。セリフがないなんて、プロの声優を目指してるわたしたちにとって、ぜんぜんプラスにならない。わたしは今まで、そんなVPには出たことがなかった。わたしがラッキーだっただけなんだろうか。
VPというお仕事に、疑問を感じた。
わたしは、思い切って、みんなに聞いてみた。
「じゃあ、このホテル従業員のVPも、上手におじぎができたり、廊下を歩けたりすれば、

「うーーん。別の人が代わりにやったんだから、そうなんじゃない？」
誰でもよかったってこと？」

「……」
わたしは、言葉を失った。
そのとおりだ、と思った。
自分の存在価値がわからなくなってしまった。
VPに対する思い入れが、すごいスピードで、まるで風船がしぼむように消えた。

冷静になって考えた。
わたしは、声の仕事をやりたくて、『勝田声優学院』で声優の勉強をしてるのだ。
VPじゃなくて、アニメのお仕事がしたい。
もうVPはやりたくない。
(松田社長さんに、わたしの気持ちをきちんと話そう)
わたしは、社長に直談判する覚悟を決めた。
アニメに出たい、と主張することによって、生意気な小娘というレッテルを貼られても

仕方ない。今の状態で、アニメに恋こがれながらＶＰの仕事を続けているより、ずっといい。
でも、わたしの心の中には、松田社長ならきっと、このつらい気持ちを理解してくれる、とすがるような思いもあった。
わたしは、社長に電話をした。
一生分の勇気を、受話器に込めた。
最後の電話になるかもしれない、と思った。
けれど、ためらいはなかった。ただ、電話でうまく自分の気持ちが伝えられるか、それだけが心配だった。
わたしは、きちんと説明できるように、事前に言いたいことをメモしておいた紙を右手に握りしめ、気持ちを落ちつけて切り出した。
「以前、ホテルの従業員のＶＰを撮った時に……」
声が震えないように、お腹に力を入れたら、力みすぎて余計に声が震えた。恥ずかしいな、と思いながらも、最後はしっかり言った。
「もうＶＰのオーディションは受けたくありません。アニメのお仕事がしたいです!!」

怒られる、と怯えながら、松田社長の返事を待った。
「あれ？」
社長は小さく驚くと、意外にも、のんびりとわたしに尋ねた。
「ちさは、顔出しの仕事がやりたいんじゃなかったのか？」
「へっ!? ちがいます!! 顔出しがやりたいなら劇団に入ってます。わたしは、声優になりたくて『勝田声優学院』に入ったんです!!」
わたしは力説した。
「ああ、そうか。じゃあ、アニメのことも考えてあげなきゃな」
社長は、やさしく、温かく、のほほんと、そう言ってくれた。
(てっきり嫌われると思ってたのに……)
受話器を置いて、ひんやりと冷たい玄関に座って、わたしは、安堵のため息をついた。
泣き寝入りしなくてよかった。
勇気を出して、思い切って言いたいことが言えて、すっきりした。
松田社長にも、わたしの気持ち、やりたいことを伝えられた。
(明日から、また気合いを入れ直して、滑舌(かつぜつ)の練習をしよう!!)

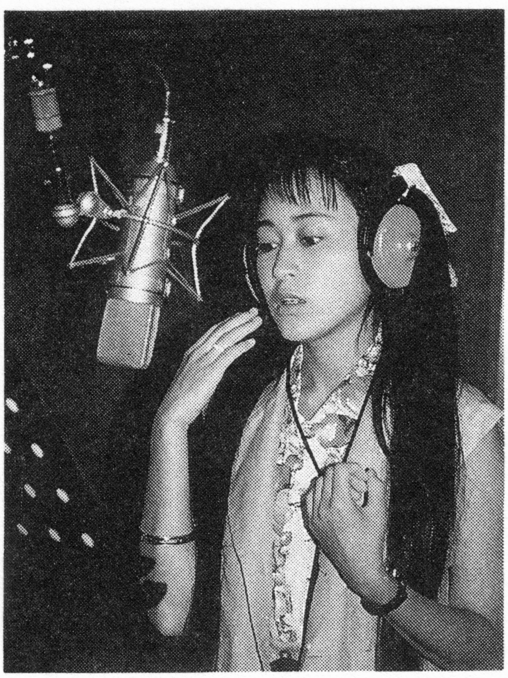
わたしは、何かが変わることを期待しながら、メモを破った。

＊外郎売り——市川団十郎が作り、歌舞伎の幕間に上演された由緒正しき口上で、約5分間のひとり芝居。



ジャンプのパーティ。はじめのころは放送局
のみなさんのかげにかくれてたの。

ちさの想い出写真館



レコーディング当日は、朝からアイドル系の
音楽を聴いてイメージトレーニングするよ。

スタジオ見学



「誰々さんが、何々っていうアニメのレギュラーをやってるんだって」
「レギュラーじゃなくて、セミレギュラーでしょ」
日本ナレーション研究所の稽古場では、こんな話題がよく飛び交っていた。
まだ本格的ではないけれど、ポツポツとテレビアニメの声のお仕事をしはじめている人が、養成所の中に何人かいるのだ。
わたしは、すでにビデオアニメでデビューして、ラジオ番組のアシスタントを半年間もつとめていたのに、まだテレビアニメに出たことがなかった。
高校を卒業して、もうすぐ1年たとうとしているのに。
こんな自分がもどかしい。
養成所仲間がテレビアニメのお仕事に行った、といううわさを耳にするたびに、感心するふりをして、じつは心の中で冷や汗を流していた。自分だけが、置いてきぼりにされてしまいそうで、泣きたくなる。
ある木曜日、稽古が終わって帰り支度をしていると、先生に「アーツビジョンの事務所へ寄るように」と言われた。
同じクラスの女の人と一緒にだ。

「事務所に行くのって、なんだか緊張しますよね!!」
わたしは、ちょっとだけ先輩のその女の人に話しかけた。
「そーだよね。何の話だろうね」
「いい話だといいですねっ」
緊張とドキドキと、稽古のあとのハイテンションで、わたしたちは、ちょっとした興奮状態で事務所のドアをノックした。
事務所には、日本ナレーションの先生が来ていて、入り口のそばにどっかり座っていた。
先生は、玄関に並んで立ったわたしたちを見ると、にこにこしながら「おう」と言った。
(あっ、悪い話じゃないな)
わたしは、先生の笑顔を見て、一瞬で判断した。
デスクの人が、わたしたちに、台本を差し出した。
アニメの台本だ。
表紙に『ミスター味っ子』と書いてある。
わたしは、急いでそれを受け取った。反射的に頭を下げて「ありがとうございます」と大きな声で言った。

(テレビアニメだ。ついに、テレビアニメのお仕事がきたんだ)
台本を胸に抱えて感激にひたるわたしに、先生が声をかけた。
「よかったな。ちさもアニメの方で、もっとな」
「はいっ!!」
「事務所にがんばってもらわないと」
先生は、デスクの人を横目で見ながら、念を押すようにそう言って、わたしを激励してくれた。
すぐに手帳を出して『ミスター味っ子』の録音日と時間、スタジオの場所を聞いた。偶然にも、わたしのはじめてのテレビアニメ出演日は、高校の卒業式からちょうど1年たった、3月1日だった。

わたしは、それから毎日、台本が目に入るとスッと手に取って、丸暗記するほど『ミスター味っ子』を読んだ。
台所に台本を持っていって、晩ごはんの支度をするママの後ろで、わざわざ大声で練習したり、ベッドにもぐって読んだり、まるで台本が瞬間接着剤で手にくっついてしまった

かのように、常に持ち歩いていた。
週末は『勝田声優学院』にも、バインダーにはさんで持っていった。
わたしは、うれしくてうれしくて、『勝田』の仲良しの子に『ミスター味っ子』に出られることになった話をした。
すると、その子は、ハッと思い出したように言った。
「あれ？　『味っ子』って、高木渉くんがスタジオ見学してるアニメじゃない？」
「ええっ!?」
わたしは、すごくショックで、びっくりして、言葉につまった。
「ねえ、ちさも見学に行くの？」
「……えっ!?　あ、ううん、1回だけのゲストの役もらったんだよ」
わたしは、ボーッと答えながら、渉くんの顔を必死に思い浮かべた。
渉くんとは一度も同じクラスになったことがない。たしか『勝田』の同期で、2歳年上の男の人だ。
学生か社会人か、よく知らないけど、大学生のお兄ちゃんみたいな印象がある。
研究科の卒業発表でお芝居を見た時、渉くんはとても上手だったので、よく覚えていた。

(しまった!! 先を越された!!)

同期の中ではわたしが一番早くデビューしたのに、足ぶみしているうちにすっかり抜かされてしまっていた。

まさか渉くんが、テレビアニメのスタジオに、毎週レギュラーで見学に行っているなんて……。

(わたしは、この1年間なにをぐずぐずしていたんだろう)

アルバイトと、ほんの少しのVPのお仕事、あとは『勝田』の課題の練習を寝る前にしていただけだ。

わたしは、努力していたはずだった。でも、努力しているつもりになっていただけで、本当はボ――ッとしていただけだったのかもしれない。

同期の男の子がスタジオ見学しているのも知らずにいたなんて、お仕事に対する姿勢が前向きじゃない証拠だ。

(もっともっと、お仕事に貪欲にならなきゃ)

負けず嫌いのわたしは、渉くんに先を越されてしまったことが、強烈にショックだった。

でも、今回の『ミスター味っ子』の場合は、渉くんがスタジオにいてくれることが、な

んとなくうれしい。
なんと言っても、はじめてのテレビアニメだ。勝手がわからず、困ることもあるだろう。先輩たちに囲まれたスタジオで、渉くんはいろいろ教えてくれるはずだ。
わたしは、バインダーにはさんだ台本を見つめて、そっと微笑んだ。

『ミスター味っ子』のアフレコ当日。
わたしは、かなり緊張しながら、スタジオに向かった。
スタジオに着くと、渉くんがいた。
わたしは、渉くんの顔を見ると、ホッと安心した。
(知ってる人がいてよかった)
「おはようございます!!」
わたしは、渉くんにも、他の先輩たちにするのと同じように、ていねいに挨拶した。
ここは、プロの仕事場なのだ。いくら同期だって、基本の挨拶はしっかりしなければいけない。友だちだって、子役の人だって、テレビアニメ初体験のわたしには先輩なのだ。
スタジオは、なごやかな雰囲気だった。

「はじめまして、アーツビジョンの横山智佐です。よろしくお願いします」

わたしが、先輩たち一人一人に挨拶をすると、みんな、にこっと笑ったり、わざわざ席から立ち上がって下さったりして、挨拶を返してくれた。

どこに座ったらいいか渉くんに聞くと、「レギュラーの人たちはいつも同じ席に座るから、横の方に座っていた方がいいよ」と教えてくれた。わたしは、ドアのすぐそばのすみっこに座った。

本番が始まると、空気はピシッとひきしまった。

わたしのセリフは短いのが2、3個だけだったので、なんとかNGを出さずにセリフを言い終えた。

自分が興奮しているのがわかる。

いつの間にか、緊張のドキドキが興奮のドキドキに変わっていた。

(やっぱり、スタジオはすごい!!)

頭に雷が落ちたようなショックだった。

当然のことだけど、養成所とは迫力がまったくちがう。

稽古で100回アフレコの練習をするより、1回スタジオに来て、先輩たちの演技に触

れる方が、はるかに勉強になる。
わたしは、今日、それを肌で感じた。
「やっぱりすごいね!! 現場に出なくちゃダメだね!!」
興奮をおさえきれず、わたしは、アフレコが終わるとすぐ、渉くんをつかまえて話した。
「ね。全然ちがうでしょ!!」
渉くんも、身にしみて感じているみたいだ。
「いいなあ。ちさも、もっとスタジオに行きたいな」
「ちさちゃんも、見学したいって事務所に言えば、させてもらえるんじゃない?」
「えっ!? そうかなあ。言ってみようかな?」
「うん!! オレだって見学させてもらってるんだから」
渉くんの言葉は、わたしに勇気をくれた。
プロとして活躍している人たちに混ざって、スタジオで学ばなくちゃダメだ。いくら稽古をしたって、毎週スタジオに来ている人にはかなわないんだ。
わたしは、テレビアニメのスタジオ見学をさせてもらえるように、事務所にお願いする

ことにした。

さっそく、アーツビジョンに電話をかけた。

「先日『ミスター味っ子』に出たとき、すごく勉強になったので、わたしも渉くんみたいに見学したいんですけれど……」

わたしは、熱っぽく、どのくらいスタジオで感激したかを伝えようと、力いっぱい話した。

けれど、電話を受けたデスクの人の声は、申し訳なさそうで、弱々しかった。

「見学ですか……。みんな行きたがるんですけどねぇ。スタジオには、スタッフの方たちも大勢いらっしゃるから、迷惑になる場合があるんですよ」

「……えっ、は、はい」

「小さなスタジオにね、来たい人がみんな来ちゃったら、大変なことになるでしょ……」

「……そうですか……」

わたしは、納得したふりをしながらも、あきらめきれないまま受話器を置いた。

だって、渉くんは見学に行ってるのだ。渉くんは良くて、わたしはダメなんて、そんなの悲しすぎる。

（ここでくじけてはいけない。お仕事に対して前向きにならなきゃ）
わたしは、自分をふるい立たせて、再び事務所に電話をした。今度は、松田社長さんに直接お願いしてみよう、と決めた。
社長は、もうデスクの人から聞いて、わたしがスタジオ見学したがっていることを知っていた。
「スタジオ見学か……。でもね、いろんな事務所の子がスタジオ見学したがるけど、あんまり大勢が来ちゃっても、邪魔になっちゃうだろう？　ちさだけじゃないんだからね」
電話に出た社長の声は、いつものようにほのぼのとしていた。でも、社長もスタジオ見学には消極的だ。
わたしは、ムキになって力説した。
「でも、現場に出なきゃダメだって思ったんです。スタジオで学びたいんです」
「まあ、ちさの気持ちはわかるけど、あせらなくても大丈夫だろ」
「あせってないです。ただ、前向きにどんどん勉強したいんです」
「でもなあ。『味っ子』はもう渉が見学に行ってるしなあ……」
「『味っ子』じゃなくてもいいんです。とにかくスタジオ見学したいんです。できません

か？」
わたしは、涙声でうったえた。
「わかった。じゃあ考えてみよう」
わたしの強い想いが届いたのか、松田社長は、折り返し連絡をする、と約束してくれた。
数日後、社長から電話がかかってきた。
「ちさも、渉と同じ『味っ子』に行くか？　5月31日の水曜日に、見学できるように頼んだから」
「は、はいっ!!　ありがとうございました!!」
わたしは『ミスター味っ子』のスタジオに行けることになった。
今度はゲストじゃなくて、本当の見学だ。役がないのはさびしいけれど、でも、その分じっくり先輩たちの演技が見られる。ねばりにねばって、やっと行けることになった見学だから、しっかり勉強しなければ。
「見学させていただきます。アーツビジョンの横山智佐です」
スタジオに入ると、わたしは、スタッフの方々や先輩たちに、片っぱしから挨拶をした。

迷惑だな、見学かよ、と思われないように、スタジオには入らず、ディレクターさんがいる後ろのブースのすみに立っていた。すると、先輩たちはやさしく、
「見学でしょ。台本、たぶん余ってるからもらっておいでよ」
「そんなところに立ってないで、スタジオに入れば。遠慮しなくて大丈夫だよ」
「お菓子、食べてもいいんだよ」
と、次から次に声をかけて、不自由がないようにいろいろ勧めてくれた。
暖かい心づかいに、わたしは、ちょっぴり感動した。そして、わたしもこんなふうにやさしい先輩になりたい、と思った。
録音が始まった。
わたしは、セリフをしゃべる時の先輩たちの表情や、マイクと口の距離を、食いいるように見ていた。
マイクは3本しかないので、どうしても混み合う。だから、セリフが終わると、サッとマイクのなめ前にしゃがんだり、顔を横によけたりして、後の人にマイクをゆずるのだ。この素早い動きも勉強になる。
本番中は、静かにしていなければいけない。音を立てずに台本をめくるために、人それ

ぞれ台本の持ち方を工夫しているのも、よくわかった。
余計なノイズ（音）が入ってしまうと、その場面は録り直しになるので、誰かがセリフをしゃべっている間は、気をつけて、息を止めるようにして席を立つ。そして、ぬき足さし足でマイク前にたどりついて、セリフを言うのだ。
スタジオでは、何もかもが勉強になる。
先輩たちの演技はもちろん、それ以外にもマイクの使い方や、台本のチェックの仕方も、大切な勉強だ。
録音は、3時間ぐらいで終わった。
わたしは、渉くんのマネをして、お菓子やお茶の後かたづけを手伝った。胸の中は、いい映画を見た後のような感動でいっぱいだった。
わたしがゴミをまとめていると、後ろのブースに座っていたおじさんが話しかけてきた。
「君は、どこの子だい？」
おじさんは、ほていさまのようにニコニコと笑っている。
（しまった!!　ご挨拶しなくちゃ!!）
わたしは、あわててゴミを下に置いて、頭を下げた。

「アーツビジョンの横山智佐と申します。挨拶が遅れてすみません」
「いやいや、いいんだ。おじさんは、たてかべというんだけどね」
「はい。よろしくお願いします」
わたしは、挨拶もできない無礼者だと思われないように、笑顔いっぱいでもう一度頭を下げた。
「そうか、アーツなのか」
「はい」
「君は飲み会に行くか？」
「えっ!?」
そう言えば、録音の後でご飯を食べに行ったり飲み屋さんに行ったりして、そこで聞くこぼれ話がまたタメになる、って渉くんが言っていた。
「あの、わたしも飲み会に行ってもいいんですか？」
わたしは、おずおずと聞いた。
すると、たてかべさんは、少し強い調子で言った。
「いいですか、じゃなくて、積極的に参加しなきゃダメだぞ!!　いいね!!」

「あ、はい!!」
「スタッフの人も後から来るからね。もし時間があるんだったら来なさい」
たてかべさんは、決して押しつけるようにではなく、でも重々しく言った。
わたしは、まるで催眠術にかけられたように、心の中で「はい」と答えて大きくうなずいた。
たてかべさんと、渉くんと、3人でスタジオのそばの飲み屋さんに着くと、もう先輩たちは飲み会を始めていた。
(たった1回見学にきたくらいで飲み会に参加するなんて図々しい、と思われないかな)
暖簾(のれん)はくぐったものの、わたしは内心ビクビクしていた。
たてかべさんは、そんなわたしの気持ちをわかってくれたのか、わたしにとなりの席に座るように勧めてくれて、飲み物までオーダーしてくれた。
「君は、もうみんなに挨拶したのかな?」
「あ、はい。あの……」
まわりを見まわすと、先輩たちは、親子のようなたてかべさんとわたしを、ニコニコ見ている。恥ずかしくてうつむくわたしに、たてかべさんは親しげに話しかけてくれた。

「ところで、君は何て呼ばれてるのかな？」
「はい。ちさとか、ちーちゃんとか……」
「じゃあ、ちさちゃんって呼んでもいいかね、おじさんは？」
「は、はい」
「ちさちゃんは、来週も見学に来るのか？」
「いえ、あの、今日だけなんです」
「なんだ？　何で来ないんだ？」
「……あの、見学したい人は大勢いるから、スタジオにも迷惑になるし、って事務所に言われているので……」
「事務所なんて気にするな!!」
いきなり怒ったように、たてかべさんが言った。
わたしは、びっくりして、たてかべさんを見つめた。たてかべさんの目は、真剣そのものだ。
「いいか。たてかべがいいって言った、って言っていいから、事務所に話して来週も来なさい!!　いいね!!」

「は、はいっ!!」
「見学なんて、一回だけ来たってしょうがないんだから」
わたしは、たてかべさんの目から自分の目をそらすことができなかった。
たてかべさんの目の中に、前向きなつもりですっかり逃げ腰になっている小心者のわたしがいた。
（このおじさん……いったい何者なんだろう？）
こんなにぐいぐい引っ張ってくれる人ははじめてだ。
先輩たちのおしゃべりに相槌を打ちながら、わたしは、たてかべさんのパワーと、なぜこんなに親切にしてくれるのかを考えていた。
帰り道、わたしは渉くんに、謎めくこのおじさんについて聞いてみた。
渉くんは、きょとんとして教えてくれた。
「ちさちゃん知らないの？　タイムボカンシリーズの悪役とか、ジャイアンの声のたてかべさんなんだよ。大ベテランさんなんだけど、今は『バオバブ』っていう事務所のマネージャーをしてるんだよ」
「え――っ!!　他の事務所のマネージャーさんなの？」

「そうなんだよ。新人にやさしくて、面倒見がよくて、〝いいな〟と思った子は事務所の枠をこえて売り込んでくれるんだよね」
「ふ――ん。すごい人なんだね」
渉くんは、たてかべさんに気に入られているみたいだ。
(ちさも、目をかけてもらえるといいな)
わたしのように、右も左もわからないド新人には、たてかべさんのように強力なパワーでサポートしてくれる人が必要なのだ。

次の週も、わたしは『ミスター味っ子』のスタジオ見学に行けることになった。
たてかべさんに言われたとおり、ずっと続けて見学に行きたい、と事務所にお願いしたのだ。
このことをたてかべさんに報告すると、「ほら言ってよかっただろ」と自分のことのように喜んでくれた。
録音が終わると、たてかべさんは必ず飲み会に誘ってくれた。みんな都合が悪くて飲み屋さんに行かないときは、二人でラーメンを食べた。

たてかべさんは、プロとして仕事をするための心構えを、いろいろ教えてくれた。
思い切り演じること。飲み会には積極的に参加して、目立つこと。大勢のスタッフさん、先輩たちに早く顔を覚えてもらうこと。他のスタジオで『味っ子』で一緒の先輩に会ったら、自分から話しかけること。オーディションの時、もしもあがってしまったら、自分の一番きれいな声を出すことだけを心がけること、などなど、数えきれないほどのアドバイスをしてくれた。

さらに、たてかべさんは、中国映画『瑞雲(ずいうん)』の吹き替えにわたしを推薦してくれて、わたしは、そのお仕事をすることになった。

他の事務所のマネージャーさんなのに、わたしにお仕事までくれたのだ。

「ちさちゃんは、事務所、バオババブだよね」
と先輩が間違えるほど、わたしはたてかべさんにお世話になっていた。

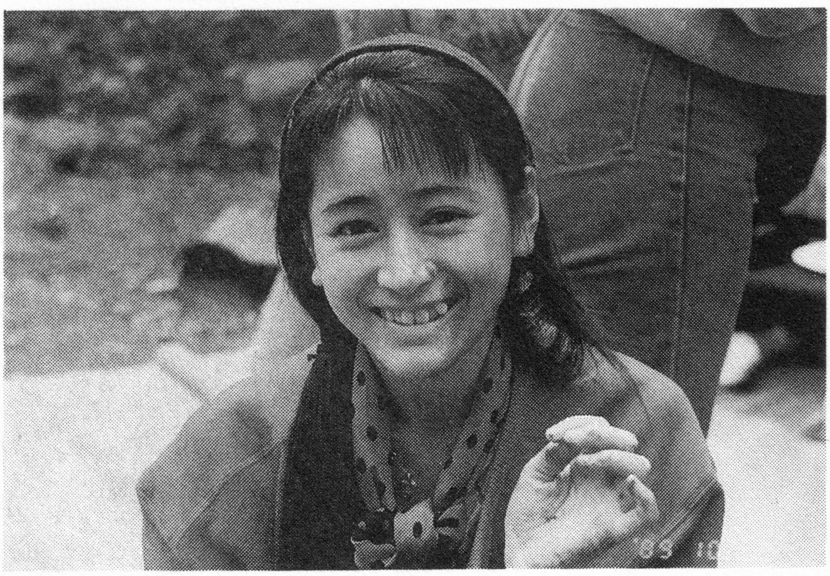
『ミスター味っ子』のアフレコには、番組終了まで、約3カ月通った。
スタジオでは、先輩たちから演技を盗むように勉強した。
そして、アフレコの後は、たてかべさんから精神面を学んだ。
たった3カ月だけど、高校受験の時よりもたくさんの知識をつめ込んだと思う。この知

識は、これからわたしがプロの声優として生きていくために、絶対役に立つ。
私の先生は『ミスター味っ子』と、もう一人、たてかべ足ながおじさんの、強力コンビだった。



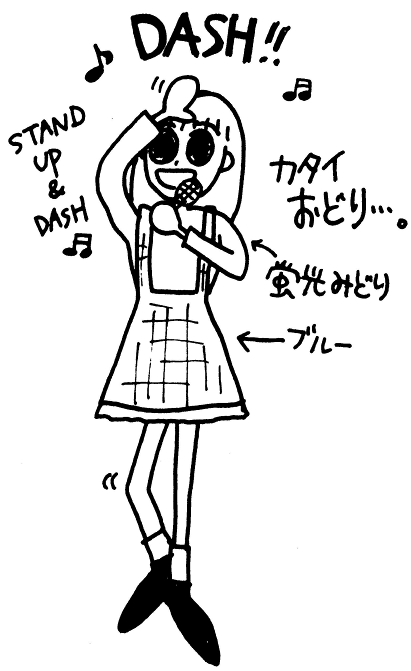
『ミスター味っ子』バーベQ大会。番組の収録が終わって
数カ月後、同窓会みたいにみんなで集まったのだ。

ちさの想い出写真館



バーベQのヤツ、女の子の顔にすすをつけるなんて許せ
ない。顔も手もGパンも、まっ黒おばけになっちゃった。

レコードデビュー



1988年9月。
集英社の会議室で『ジャンプ放送局』の打ち合わせをしていると、ポニーキャニオンの人がやって来た。
『ジャンプ放送局』にお客さまが来ることは珍しくなかったけれど、わたしを訪ねてくれた人ははじめてだ。
テレくさいような気分でお話を聞くと、なんと、「ポニーキャニオンからレコードを出しませんか」と、その人は言ったのだ。
わたしの目の前が、バラ色に輝いた。
レコードデビューできるんだ。
一生のうちに、自分のレコードが出せるなんて、夢にも思っていなかった。
そう言えば、保育園を卒園する時にもらった思い出ノートには、わたしの将来の夢は歌手か体操の選手、と書いてあった。
華やかな世界にあこがれる下町おてんば娘は、このころからすでに存在していたのだ。
『ジャンプ放送局』のみなさんも賛成してくれて、わたしはその場ですぐに「よろしくお

願いします」と、お釈迦さまを拝むようにありがたい気持ちで、レコードの話を承諾した。

（ちさなんかでいいのかなぁ……？）

「心配ならやめる？」と聞かれたら「絶対やる!!」と答えるくせに、それでも少しだけ不安はあった。

レコードが売れなかったら恥ずかしい。

「横山智佐のレコード、ありゃ何だったんだ？」とか、もっとひどく「えーっ!! レコードなんて出してたの？」「かんちがいしてんじゃないの？」なんて、うわさされたりして、とんでもなく悲しい結果になりかねない。

でも、こればかりはやってみなくちゃわからない。

逆に大ヒットしちゃうかもしれない。

（歌番組に出て、有名になって、芸能人と結婚しちゃったりして……）

ありえない美しすぎる想像をして、わたしはにんまり口元をゆるめた。

プレッシャーを感じて心細くなったり、輝かしい将来に期待したり、わたしの心臓はドキドキと忙しかった。

失敗しても成功しても、どっちにしてもレコードだ。今のわたしを記録しておこう。き

っとステキな記念になる。
わたしは、レコードという誘惑に、気持ちよく流されることにした。

ところが、それから3カ月。ポニーキャニオンからは、何の連絡もなかった。
(おかしいなあ。レコードの件はどうなっちゃったのかなあ)
あの話は忘れて下さい、と空気が言っているような気がした。不幸な話には触れない、という暗黙の了解が世の中にはあるから、わたしはレコードの件がどうなったのか誰にも聞くことができなかった。聞くのが怖かった。
人生って、うまくいかないものだ。なんだか思う人には思われない、っていう状況に似ている。
ところが、わたしが、ひっそりとあきらめかけていた年末になって、いきなり本格的になったレコードの話が舞い戻ってきた。
年が明ける前に、わたしは、静岡にある、模型で有名な〝タミヤ〟の本社に、ご挨拶をしに行くことになったのだ。
当時、〝タミヤ〟と言えば、単3乾電池2本を使い、恐るべきスピードで走るミニ四駆と

いう車のおもちゃが大人気で、少年たちのハートをがっちりつかんでいた。
ミニ四駆は、チョロQで遊んでいたわたしの子供時代が、まるで石器時代くらい昔に感じてしまうほどよくできている。おもちゃと言ってはいけないんじゃないか、とさえ思える。
驚いたことに、わたしは、そのミニ四駆のテーマソングを歌うことになったのだ。
大ヒットの予感がする。
少年たちは、ミニ四駆に夢中なのだ。
ミニ四駆のレコードが出れば、きっと絶対に欲しくなる。
静岡へ向かう新幹線の中で、ポニーキャニオンの人が、
「ちさちゃんの歌を、ミニ四駆で遊びながら子供たちが口ずさんでくれるといいね」
と熱っぽく語った。
ますます大ヒットの予感が強くなってきた。
タミヤ本社に着いた。
立派なビルだ。ただ敷地があまりにも広大なので、ポツンと静かに立っている感じだ。
澄んだ空気がおいしい。

わたしは、さっそく、ネクタイを締めたいかにも立派なおじさんたちにご挨拶をした。
おじさんたちはみんな「東京から、わざわざ、ようこそ」とほがらかに迎えてくれた。
(さすが、模型をつくる会社だ)
いばっているおじさんは一人もいない。ふんわりとした物腰で、子供に接するようにお話してくれる。
「ミニ四駆がデビューで、これから歌手として活躍されるんですね。がんばって下さいね」
おじさんたちは、口々にそう励ましてくれた。わたしのことを新人アイドル歌手だと思っているらしい。
わたしは、プロの声優を目指しているんです、と言おうか言うまいか悩んだ。でも「いえ、歌手じゃないんです」と告白してしまったら話がややこしくなる。なんで歌手じゃない子がミニ四駆のテーマソングを歌うんだ、と疑問に思われてしまうにちがいない。
せっかくの温かい雰囲気をこわしたくなくて、わたしは、声優のことは黙っていることにした。
静岡のタミヤ本社では、難しい打ち合わせもなく、ご挨拶をして、会社にある車の展示物やポスターを見ただけだった。

でも、東京に戻る新幹線に乗ったわたしには、しっかりと闘志のようなやる気が湧いていた。
おじさんたちにいただいたたくさんの名刺の束をポケットの中で握って、わたしは、自分が歌うミニ四駆のレコードがヒットするように願った。

年が明けると、ミニ四駆シフトとも言えるスケジュールが、一気に入ってきた。
わたしは、今年こそいっぱいお仕事するぞ、と思いを込めて買った、必要以上に大きな手帳の真新しいページに、うきうきしながらスケジュールを書き込んだ。
(この文字を全部きれいに書けたら、ミニ四駆のレコードが大成功する)
と勝手に決めつけて、ゆっくりとていねいに万年筆を運んだ。次のページをめくる時は、フーフー息をかけて1分以上乾かした。

《1月10日ごろ、ポニーキャニオンへ歌のテープを取りに行く》
《16日、ミニ四駆のイベントに行く。平和島流通センター》
《17日、ミニ四駆レコーディング。音入れ》

《18日、19日、ミニ四駆レコーディング。歌入れ》
《23日、ジャケット写真撮影》

春休みにも、ミニ四駆のイベントが入る予定。歌も歌う。
わたしの手帳は、いきなりにぎやかになった。
(売れっ子のアイドル歌手みたい)
わたしは、松田聖子さんの手帳もこんな感じなのかしら、と突拍子もない想像をして、ひとり喜んでいた。

歌の練習用テープを取りに、ポニーキャニオンへ行った。
おニャン子クラブからとんねるずまで、壁にびっしりポスターが貼られている。
(ポニーキャニオンからレコードが出せるなんて、すごい、すごすぎることなんだ)
わたしは、改めて事の重大さをかみしめた。
「これが練習用のテープだから。家で歌ってみてね」
いただいたテープには、ポニーキャニオンのカセットレーベルがついていた。裏に鉛筆

で『DASH!!』と書いてある。
これが、わたしのデビュー曲のタイトルだ。
(男の子が好きそうな、かっこいい曲なんだろうな)
タイトルから曲や歌詞が想像できる。
『電磁マン』みたいにかっこいい歌詞で、『宇宙戦艦ヤマト』の佐々木功(ささきいさお)さんみたいに歌えればいいな、と支離滅裂に歌のイメージを思い描いていると、ポニーキャニオンの人が、何やらガサガサと机の引き出しをかきまわしはじめた。
「あっ、ちょっと待っててね」
と言いながら、大きな戸棚まで開けた。
何をしているのか不思議な気持ちで見ていると、いきなり、わたしの前にドサッとCDやカセットが置かれた。
「これ、お土産に持って行っていいよ」
よく見ると、〝見本〟と書いた赤いシールが貼ってある。
(これはきっと、業界の人しか手に入れられない貴重なものなんじゃないだろうか……)
わたしは、なんだかとんでもない世界に来てしまったような、ちょっとおそろしい気分

になった。
わたしの中には、〝芸能界は怖い〟というイメージがある。理由はないのだけれど、ただそう感じるのだ。
あれよあれよという間に、お土産のＣＤは、ポニーキャニオンの手さげ袋に入れられ、わたしは、それをしっかり握っていた。
（この紙袋も業界の人しか持てないんだろうな……）
大きなスケールの大きなプロジェクトに、どんどん巻き込まれていく。
わたしは、見えない何か、波のようなものに流されないように、胸の中で両足をふんばった。

そして、いよいよ、レコーディングの日がやってきた。
1月18日。
わたしは、四谷にあるレコーディングスタジオへと向かった。
緊張感はない、と言ったらウソになるけれど、そんなに激しく大きくはなかった。
とりあえず、今日は、スタジオに慣れるための練習日なのだ。

ふつうレコーディングは1日だけで、サッと終わってしまうものらしいけれど、わたしの場合はまったくのはじめてなので、ポニーキャニオンの人が気を使って、練習のためにスタジオをとってくれたのだそうだ。

明日の本番で戸惑わないように、本番と同じようにマイクを立てて、ヘッドホンをつけた。

スタジオの人が、わたしの足元にある小さいワゴンのような機械を指して、「ここが歌で、全体のバランスがここで……」と赤や黄色のボタンについて説明をした。

どうやら、このm&mチョコのようなカラーボタンを回すと、声や音楽のボリュームが調節できるらしい。

「じゃあ、練習だから気楽に、元気よく歌ってね」

ヘッドホンの中から、ディレクターさんの声が響いた。

機械をとおした声は、何だか冷たく感じる。

ガランとした広いスタジオに、わたしは一人ぼっちだ。

孤独感が、緊張感を呼んできて、急に心臓がドキドキし始めた。

ヘッドホンから、TVの砂の嵐のような音がサー――ッと聞こえてきた。

譜面台にのせた歌詞カードをじっと見つめた。緊張のせいで、目の焦点がずれる。つけ慣れないヘッドホンが、ズルズルとずり落ちてくる。

体が自由に動かない。

遠くの方でかすかに、車のレースが始まるときの音が聞こえた。

わたしは、足元のカラーボタンを回した。

すると、時報のような音がポ――ッと鳴り、いきなり大音響で前奏が流れた。

わたしは、あわててカラーボタンをつまんでボリュームを下げた。

練習用のカセットテープには入っていなかった音が、たくさんプラスされている。

しっかり本格的なカラオケができあがっていたのだ。

わたしは、一生懸命歌った。

へたくそだと思われたくない。カラオケの方が立派で歌が追いついてない、なんて思われたくない。

二番まで通して歌った。中学生の頃に水泳大会で100メートル平泳ぎをした時みたいに、肺が苦しくなった。力みすぎたせいだ。

「いいじゃない。問題ないじゃない」

ディレクターさんがほめてくれた。
「もう一度、通して歌ってみましょうか」
1回歌っただけで、苦しくなってしまったけれど、ほめてもらったのがうれしくて、わたしはがんばって声をしぼり出した。
3回、4回と続けて歌った。歌っているうちに体が慣れてきて、だんだん楽しくなってきた。
最後に、歌を録音して、それをカセットテープに落としてくれた。
わたしは、さっそくテープをウォークマンに入れて、聴きながら電車に乗った。
(うわ!! なんだこのへたくそ!!)
自分で思っていたより、わたしの歌はかなりお粗末だった。ちゃんとマイクにエコーをかけてもらったのに、ごまかしきれていない。
せっかく『DASH!!』というかっこいい歌なのに、力強さが全然ないのだ。
(今日の夜は、歌の特訓しよう!!)
自分の歌のへたさに赤面しながら、わたしはシリアスに思った。

1月19日。

レコーディング、本番だ。

市ケ谷にある一口坂(ひとくちざか)スタジオの2スタで、午後1時から、ついに、わたしのデビュー曲のレコーディングが始まるのだ。

まず、A面の『DASH!!』を録って、その後、B面の『ミニ四ファイター組み立て歌』をレコーディングする。

「コーラスは、イブという有名なグループの方たちがやってくれたんだよ。イブは自分たちのレコードも……」

ポニーキャニオンのディレクターさんは、うれしそうに言った。

わたしは、じんわりとおそろしいプレッシャーを感じつつ、

「え――っ!! そんなすごい人たちが!! ありがとうございます!!」

のしかかる圧力をふりはらうように、言葉に元気を込めた。

レコーディングスタジオは、音がよく響くように板張りで、オーケストラが入る広さだ。

マイクがポツンと立っていて、歌っている姿がディレクターさんに、ガラスごしに真正面から見られてしまう。

でも、アニメの声のお仕事のように、後ろから見られていて背後で何を言われているかわからない状態よりも、正面でスタッフの人たちの表情が見える方が、はるかに安心できる。
レコーディングは、1時を少しすぎてから始まった。
まず、のどを慣らすために、2回、通して歌った。
曲をA、B、Cブロックに分けて、「AとBはこんな感じ。Cはサビだからパンチを入れて」など、細かく歌い方を指導してもらって、録音しながらもう一度歌った。
「じゃあ、こちらで一緒に聴いてみて下さい」
録りたての歌をディレクターさんのブースで聴きながら、ダメなところや歌い方を変えるところなどをチェックして、またスタジオへ。
今度は、4、5回続けて歌って、少し休憩。
「疲れた？　大丈夫？」
わたしの調子を気にしながら、マネージャーさんがジュースを出してくれた。
「じゃあ、後は部分的に直しながら録っていきますから」
驚いたことに、歌が良くなかったところを一小節ずつ歌い直すように、指示が出された。

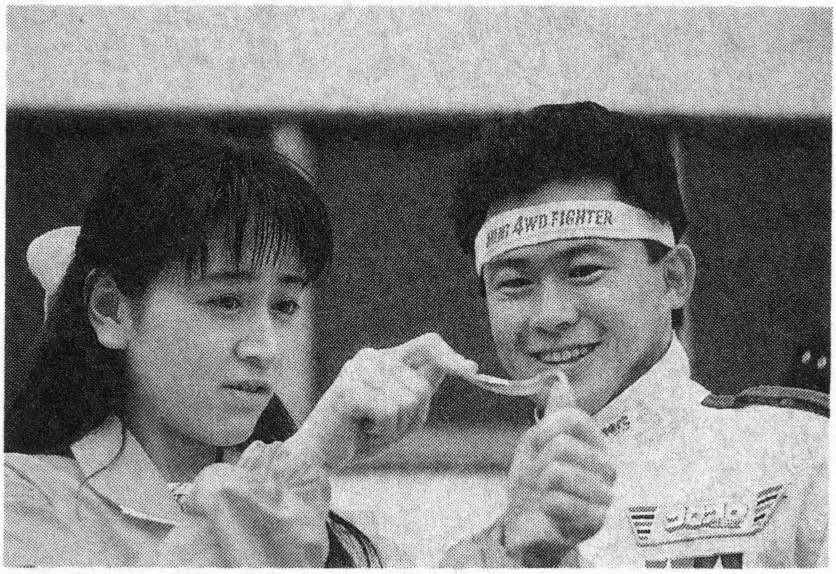
その部分だけを、前に歌ったNG部分と取り換えるのだ。機械の性能が、わたしの歌を助けてくれる。なんとも不思議だ。
曲がまとまってゴールが見えてきた。
そこへ、タミヤの社員さんでミニ四駆マニアの少年たちがあこがれている前ちゃん、ミニ四ファイターさん、それにミニ四駆のマンガを描いている徳田ザウルス先生も到着した。
歌のチェックをしにディレクターさんのブースに入ると、ファイターさんたちは「いやぁ、お上手ですね」とほめてくれた。
わたしは、ちっとも歌に自信がないので、素直に喜べなかったけれど、だけど本当はとてつもなくうれしかった。
サビの一番声が高くなるところを録り直した。
「じゃあ、これでもう大丈夫だから、こちらで聴きましょう。お疲れさま!!」
ディレクターさんの声が、やさしく響いた。
同時に、ヘッドホンから拍手が聞こえた。
ハッと見ると、ディレクターさんのブースにいるみんながニコニコ手をたたいていた。
耳に入る拍手の音と、ガラスごしのみんなの顔が微妙にずれていて、衛星生中継を見て

いるみたいだ。
わたしは、宇宙遊泳しているようなフワフワ気分で、みんなのいるブースへ走った。
みんな、わたしを見ると、また拍手をしてくれた。
こんなにテレくさくてうれしい拍手は、生まれてはじめてだ。
「聴きましょうか!!」
ディレクターさんのかけ声で、録りたての歌が流れた。
(あっ、ここへた。うわ、音程が悪い。ああ、このフレーズやり直したい)
反省の嵐だ。予想以上に、わたしの歌はへただった。でも、これが精一杯なのだ。がんばって歌ったんだから満足しなくちゃ。
目頭が熱くなった。
(こんなところで泣いちゃいけない)
そう思った時には、もうでっかい涙がボロボロとこぼれていた。
うまく歌えなかった無念さと、レコーディングが終わった安堵感で、うっかり泣いてしまった。
いきなり泣かれても、みんな困るだろうな、と思いながらも、わたしは涙を止められな

かった。
「どうしたの？　ねえ、あの、ねえ」
ディレクターさんは弱ったなという感じで、わたしの顔をのぞきこんだ。
「すみません、ひっく、あんまり、ひっく、へたなので悲しくて」
子供のようにしゃくりあげるわたしに、みんないっせいに「上手だったよ!!　良かったよ!!」となぐさめてくれた。
「すみません、すみません」
わたしは、何度も謝りながら涙を拭った。

気分を変えて、B面の『ミニ四ファイター組み立て歌』のレコーディングにうつった。
これは歌というより、曲に合わせてミニ四駆の組み立て方をミニ四ファイターさんが語る、おしゃべり歌だ。
わたしは、スタジオにいるみなさんと一緒に元気よく合いの手を入れた。
(泣いたカラスがもう笑った、と言われたら元気よく「へへっ、ごめんなさいっ!!」と舌を出しちゃおう)

レコーディングって楽しい。
レコードがヒットするかしないかなんて、もう関係ない。
こんなにやさしい人たちに囲まれて、はじめてのレコーディングが無事に終わったことが、わたしの勲章なのだ。
このレコードは、絶対にわたしの宝物になる。
おばあちゃんになって、死ぬ時は、お墓まで持っていこう。



ミニ四駆のイベントでなぜかスプーン曲げに挑戦。
ミニ四ファイターさんが子供と同じ笑顔で見てた。

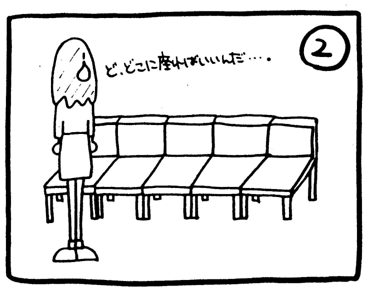
ちさの想い出写真館



『DASH!!』のシングルレコードだ!!　CDと
カセット版はおもちゃ屋さんでも売ってたんだよ。

失敗だらけの初レギュラー





約2カ月間見学していた『ミスター味っ子』のアフレコが、あと4回で終了する。毎週レギュラーでスタジオ見学に通っていたのに、終わっちゃうなんて残念だ。卒業式をひかえて、宿題もなく、めんどうだった学校行事もなくなり、最後の日だけを待っている、そんなどうしようもなく虚しい状態に似ている。

やりきれないほどさびしい。でも、じたばたしても最後の日はやってくるのだ。

さびしさと同時に、不安も生まれた。

またアニメに触れる機会がなくなってしまう。

(やっとスタジオの雰囲気に慣れてきたのに、これからどうしよう)

不安はどんどん大きくなり、落ち込みに変わっていった。

ところが、ちょうど今後の自分の活動について真剣に考えはじめたころ——。

アーツビジョンの松田社長から『桃太郎伝説』のオーディションに受かった、と電話がかかってきたのだ。

わたしは、自分の耳を疑った。

信じたいけど、夢物語みたいでとても信じられない。だって、ちょうどひとつの作品が終わろうとしている時に、新しい作品が始まるなんて、タイミングが良すぎる。

それに、1週間くらい前に『桃太郎伝説』のオーディションを受けた時、わたしはその場で（これはダメだ、落ちる）と確信していたのだ。
なぜなら、わたしが受けたのは、キジのキーコ役で、人の言葉は話すけど、キャラクター表に描かれていた絵はしっかりキジだったからだ。
キジと言えば〝キジも鳴かずば打たれまい〟の空飛ぶ鳥のキジだ。
わたしは、キジの鳴き声を聞いたことがない。キジの声をどうやってつくったらいいのか、いくらふんばってもイメージが浮かばなかった。仕方なく、混乱した頭を整理できないまま、わたしは、あがりまくりつつオーディションのコメントを読んだのだ。
ボ――ッと回想にひたっていた私に、松田社長が、
「ちさ、はっきり言って、オーディションへたくそだったぞ。よく受かったなぁ」
正直に驚きをあらわすように言った。
わたしは、思わず吹き出してしまった。
でも、とにかく『桃太郎伝説』のキーコ役に抜擢されたのだ。
「まだまだ力不足なんだから、しっかりがんばりなさい」
松田社長は、最後まで〝へた〟を強調していたけれど、わたしの耳には、もはや社長の

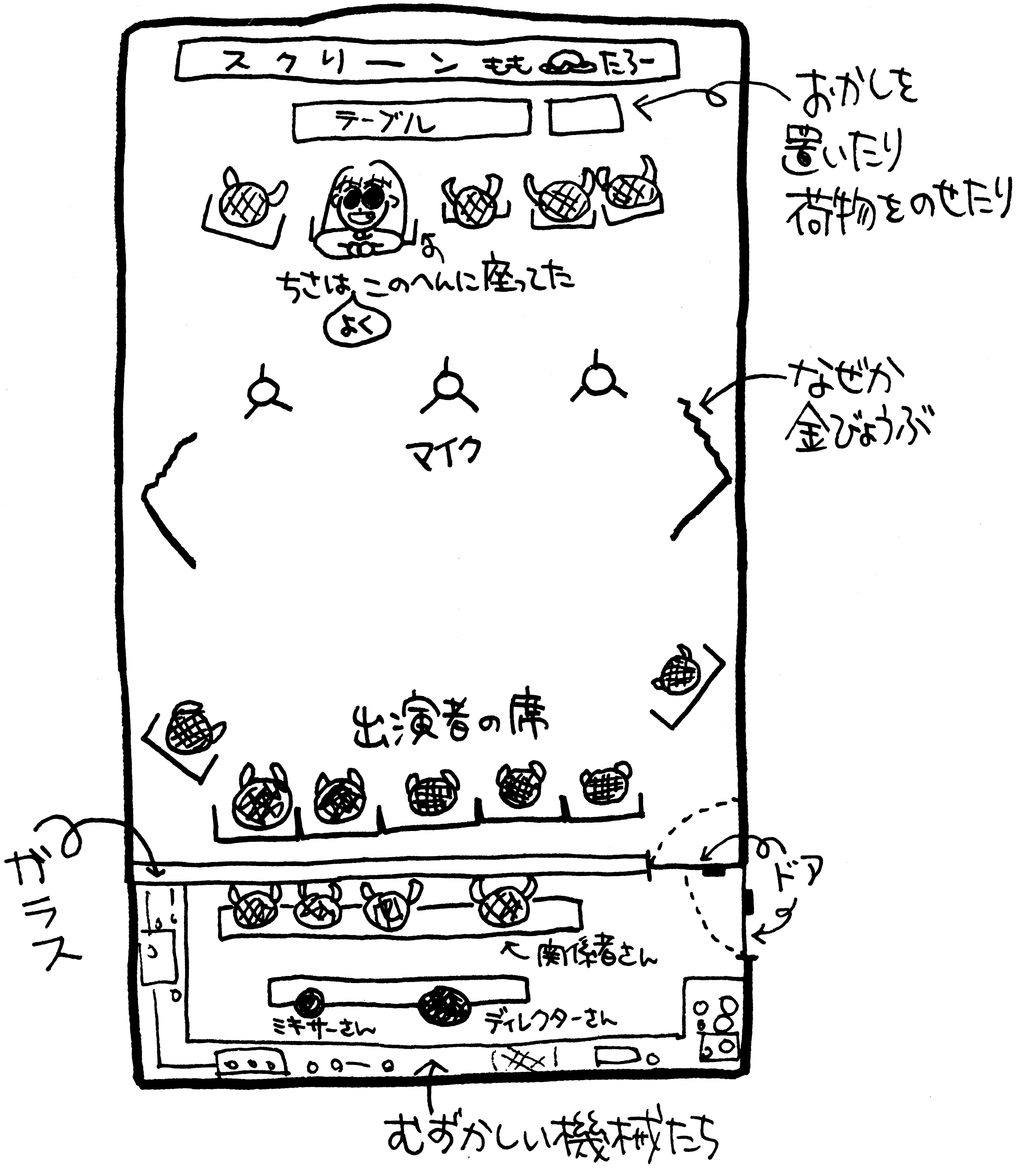
声はBGMのように心地よく響くだけだった。
じわじわと、喜びがこみあげてきた。
ついに、テレビアニメのレギュラーを手に入れたのだ。
『桃太郎伝説』は秋から始まる新番組で、1年間、続く予定になっている。
ひとつの役をずっと通して演じていくなんて、責任重大だ。
でも、だからこそ、やりがいだって大きい。
(今こそ、本当に声優としてデビューできたんじゃないか)
そんな気さえしてくる。
これからは「『桃太郎伝説』でキーコ役をやってる横山智佐です」と堂々と自己紹介ができるのだ。
なんて立派なプロフィールなんだろう。
(でも、どうせなら、かぐや姫の方がもっとよかったな)
へたくそながらなんとかオーディションに受かったわたしは、図々しくも一瞬こんなふうに思った。
よく聞く話で、主人公のまわりにいる友だち役のオーディションを受けたのに、主人公

役の方に抜擢された、ということが少なからずあるらしいのだ。
わたしも、キーコ役を受けたけどかぐや姫役に抜擢されていたら、『桃太郎伝説』の中に赤毛のアン的要素を含んだシンデレラ物語が生まれて面白かったのに。
でも、わたしはキーコ役でも、大、大、大ラッキーだ。
なんたってド新人なのだから。
あっちの役の方がよかった、なんてオーディションに受かったからこそ言えるぜいたくなのだ。

ウキウキドキドキと、わたしは第1話のアフレコに臨(のぞ)んだ。
スタジオの椅子に座ると、入学式を終えて、新しいクラスで先生を待っていた中学生の時の記憶がよみがえってきた。
名札が貼られた机が、スタジオの椅子に変わって、制服が私服になっただけで、気持ちはまったく同じだ。
不安と心細さ、期待と喜びがごちゃまぜになったものを緊張のパンで包んで、脂汗で揚げたピロシキのような、めちゃくちゃな精神状態だ。

アフレコが始まった。
わたしは「いるかしら、鬼より強い人なんて？」という不安を表現するセリフが、どうしてもうれしそうな言い方になってしまって、何度もNGを出した。
それに、演技より何より、マイクに入るのが難しくて、何度もセリフをしゃべるタイミングが遅れてしまった。
スタジオには、マイクが3本立っている。
わたしの役キーコは、桃太郎、犬、猿と一緒に行動していて、ほとんどのセリフは4人で順番にしゃべるから、4人で3本のマイクを交互に使わなければならない。
瞬間的にあいているマイクを探して、ノイズを立てないように静かに、だけど素早くマイク前に立ってセリフをしゃべるのだ。
これは、かなりのテクニックを必要とされて、ド新人のわたしにはとても難しかった。
画面を見て、台本を見て、ノイズを立てないように歩いて、マイクを探して、セリフを口に合わせて、しかもきちんと感情を込める……。
（ああっ、やることが多すぎて全部に集中できない!!）
頭はもう爆発寸前だ。

桃太郎伝説のスタジオ。



スクリーン ももたろー
テーブル
おかしを
置いたり
荷物をのせたり
ちさは、このへんに座ってた
よく
なぜか
金びょうぶ
マイク
出演者の席
ガラス
ドア
関係者さん
ミキサーさん
ディレクターさん
むずかしい機械たち

（あっ、自分のセリフだ）

と思って、急いでマイクに入り、画面を見ると、すでにパカパカとキャラクターの口が動いていて、あせって台本を見た時には次の人がセリフを言っている、という救いようのない失敗をくり返した。

また、空いているマイクにサッと入ってセリフをしゃべっても「声がOFFになってるから、きちんとマイクに入るように」とディレクターさんから注意を受けた。

なんとかマイクの前に立てたまではいいけど、今度はマイクからの距離が遠すぎたのだ。

「マイク前は30センチだ!!」

と、プラスチックの30センチものさしを振りかざして、アフレコ練習の稽古中ずっと大声で叫んでいた勝田先生の言葉を思い出した。

（あんなに養成所で勉強したのに、どうしてこんなにトチるんだろう!?）

わたしがセリフをトチると、他の人のリズムまで壊してしまう。トチリは、伝染病のごとく移るらしく、わたしは、スタジオに突如やってきた新型ウィルス状態になって、出演者のみなさんに迷惑をかけてしまった。

新人なんだからへたでもしょうがない、なんて甘えてはいられない。

（プロとして失格なんじゃないか……）
わたしは、深刻で強烈な自己嫌悪に陥った。
同じキャストであと1年、アフレコは続いていく。
（来週からどんな顔でスタジオに来たらいいんだろう。みんなが口をきいてくれなくなったらどうしよう……）
あんなに楽しみにしていたテレビアニメのレギュラーなのに、第1話にしてもう逃げ出したくなってきてしまった。
誰かが小声でヒソヒソ話をしていると、自分の悪口を言われてるような気がして怖くなった。じっと耳を澄ますと、ふつうの世間話だったり他の作品の話だったりして、わたしはぎこちないため息をついた。
後味のにがい、レギュラー初体験のアフレコだった。

第1話のアフレコで、どこのマイクを使うかが問題だ、と痛感したわたしは、第2話のアフレコに備えてマイク対策を練った。
事前に台本を読む時、自分のセリフだけをチェックするんじゃなくて、自分の前後に誰

のセリフがあるかを同時に確かめるのだ。

例えば〝わたしの前が桃太郎のセリフで、後が犬のポチのセリフだから、このセリフは猿のモン太が使ってたマイクに入ろう〟とか〝このセリフは、どのマイクでも大丈夫〟とか、それぞれのセリフの横に小さく鉛筆で書き込んだ。

単純な作業だけれど、慎重にマイクの位置を考えていたら、台本を一冊チェックするのに2時間もかかってしまった。

(よし!! これでもうマイクを迷わなくてすむぞ!!)

わたしは、意気揚々と、足どりも軽くスタジオへ向かった。

ところが、第2回目のアフレコでは、別の問題が起こったのだ。

早くスタジオに着いてしまったわたしは、すみの方の席をとり、下に荷物を置いてトイレに入った。

小さな声でこっそりセリフの練習をして、10分後くらいにスタジオへ戻ると、わたしが荷物を置いた席に、誰かが座っている。

第2話のゲストキャラクター役をやる先輩だ。

「すみません。そこ、わたしの席なんですけれど……」

わたしは、椅子の下にある自分のかばんを指して言った。
「えっ!?」
その先輩は、少し驚いたような表情をしたけれど、でも席を移動してくれた。
何の問題もないようだけれど、じつは、これが問題だったのだ。
数日後、わたしは、別の先輩にスタジオで注意された。
「ちさ、お前、先輩に席替われって言ったんだって?」
「へっ?」
わたしはすぐに『桃太郎伝説』のことだ、と思い、状況を説明した。
「そんな言い方はしなかったです。わたしが早く来て、椅子の下に荷物を置いていたので……」
すると、先輩はあきれたようにわたしを見た。
「ふつう、先輩には席を譲るもんだよ。何でオレが席を替わらなきゃいけないんだ、って怒ってたぞ」
冷や汗が出た。
これからこの世界でプロの声優としてがんばろう、と思っているのに「横山智佐は生意

気だ」なんてヘンな噂が出たら困ってしまう。

自分が間違っていたとは思わないけど、謝らなきゃいけないかもしれない、と怯えながら思った。

さらに、何かと問題がついてまわる不運なわたしは、第5話のアフレコに向かう途中、大事故に遭ってしまった。

それは、これまで19年間の生涯の中で、スクープ映像番組でしか見たことがないような悲惨な事故だった。

最寄りの駅まで原付50ccバイクで通っていたわたしは、土手っぷちで、後方から走ってきた車に追突されて、ボンネットに撥ねあげられてしまったのだ。

地面に転がり落ちた時には、下半身をすりむいて、ストッキングがボロボロにやぶけ、ヘルメットはすっ飛ばされていた。

後から現場にかけつけたお巡りさんは、車のスリップ跡と、壊れたわたしのバイクを見て「こりゃあ、バイクの子、死んだなぁ」と言ったそうだ。

わたしの記憶は、背後でキキ――ッと大きなブレーキ音がしたところで途切れていて、

次の瞬間には地面にペタンと座っていた。
わたしは、熱湯に入れられたカエルのように、びっくりした反動でバッと立ち上がり、5メートル先で倒れているバイクと、10メートル後ろに転がっているヘルメットを、しっかりした頭で確認した。
そして同時に「お仕事に行かなくちゃ!!」と叫んだ。
「今、救急車呼んでるから」と止める見物の人に、なおもわたしは「でも、遅刻できないんです。新人なんです。大事な仕事があるんです」と訴えつづけた。
だってわたしは、養成所で勝田先生に「時間で動いている世界なんだから、遅刻は厳禁だ」と厳しく教わったのだ。ド新人のくせに、遅刻なんてできない。ただでさえアフレコがへたで、何度もNGを出して先輩たちに迷惑をかけているのだから。
けれど結局「これは事件なんだから、きちんとしなくちゃダメだ、損するぞ」というようなことを、いつの間にかできあがっていた人だかりの中で説得されて、わたしは救急車を待った。
かばんとヘルメットを拾った。
バイクのエンジンをかけてみた。ドルルンと一瞬だけかかって、それから動かなくなった。

ふと気づくと、後輪がななめに曲がっている。

（廃車だ、もう乗れない……）

なんでこんなことになったのか、わたしは、だんだん悲しくなってきた。

パトカーより先に、救急車が着いた。

わたしは、救急車に歩いて乗ると、すぐ病院でＣＴスキャンを撮った。

病院から、アーツビジョンが始業する10時ちょうどに電話をかけて、謝りながら事情を説明した。

「ええーっ!!　な、何時にスタジオ入れますか!?　どんな様子なんですか!?」

デスクの人は、あわてながら時間を気にしていた。

（やっぱり、遅刻は厳禁なんだ!!　遅刻するくらいなら、交通事故で死んじゃえばよかった!!）

わたしは、親不孝なことを真剣に思った。

イライラと時間を気にしながら、警察で事情聴取を受け、外に飛び出した。

一人では乗ったことがないタクシーで駅に急いだ。わたしにとっては、ひどい出費だ。

駅のホームで電車を待つ。その時間も惜しい。

アフレコは、10時スタートだ。
すでに11時になろうとしている。心臓がひきつる。
（学生の時は、わざと遅刻して楽しんでいたのに……）
電車の速度が、いつもより遅い気がする。車掌さんを脅してもっと速く走らせようか、なんて無茶なことを考えた。
30秒おきに腕時計を見た。
（きっと、スタッフの方も先輩たちも怒っているだろうな）
泣きたい気持ちでスタジオに駆けこむ。
エレベーターが来ない。
わたしは、包帯が巻かれた足を夢中で動かして、三階まで階段をのぼった。
スタジオのドアの前に、たてかべさんがいた。
たてかべさんは、わたしに気づくと、いたずら小僧のようにニカッと笑った。
「遅れてすみません!!　おはようございます!!」
わたしは、肩で息をしながらドカッと頭を下げた。
「おう!!　ち――さぁ、大丈夫かぁ？　エレベーターでくればよかったのに」

「すみません。でも、エレベーターがこなくて……」
「そうか。ディレクターさん、心配してるぞ」
「はい、ご迷惑おかけして、すみませんでした!!」
「いやいや、大丈夫だよ。みんな怒ってないから、ね」
たてかべさんは、まるでわたしの心を読んでいるように、やさしく安心の魔法をかけてくれた。
たてかべさんに背中を押されるようにして、スタジオの重いドアを開けた。
11時30分。ちょうど、コマーシャル前までの前半部分の本番が始まるところだった。
冷たい視線と、ヒソヒソ押し殺した非難の声を覚悟していたわたしは驚いた。
ディレクターさんも、先輩たちもみんな「大変だったね」「歩けるの?」「骨は大丈夫?」と口々に心配してくれたのだ。
わたしは、みなさんのやさしさに感激しながら、ひたすら「すみません、大丈夫です、すみません」と頭を下げた。
セリフはトチるしマイクはうまく使えないし、席順のこともわからないで、おまけに交通事故で1時間30分も遅刻した。わたしの『桃太郎伝説』は失敗だらけだ。

でも『桃太郎伝説』のレギュラーについてから、うれしい出来事もあった。キーコ役で毎週スタジオに通っているうちに、マイク前での気持ちの保ち方がわかってきたのだ。

そして、わたしは、『聖戦士ロビンJr』というアニメのオーディションに受かって、面魔グリンP役もやることになった。

年末には『勇者エクスカイザー』で月山コトミ役に決まった。

どちらの番組も、レギュラー出演だ。

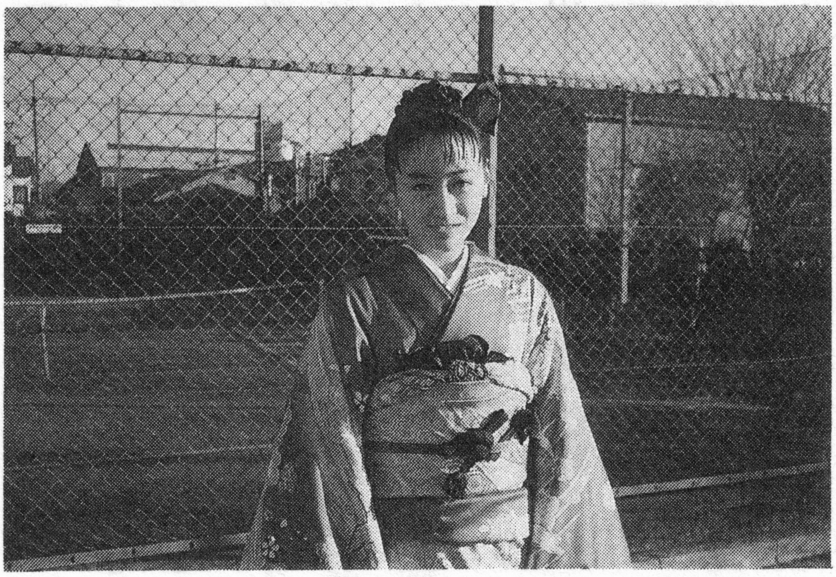
これもみんな『桃太郎伝説』で勉強させてもらったおかげだと思う。

12月20日で、めでたく20歳になった。

大人の仲間入りだ。

甘ったれで泣き虫のわたしにさよならしなくちゃ。

いつまでもNG連発していないで、しっかりプロとしてがんばるぞ。

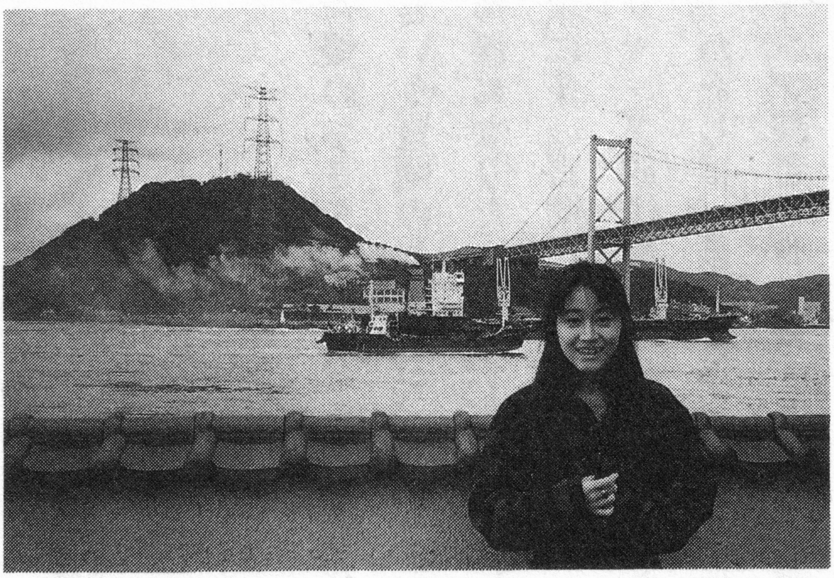


成人式。『勝田』のお友だちにかしてもらった
振袖を着た。希望に燃える20歳の日。

ちさの想い出写真館



『桃太郎伝説』の録音に振袖で行って、両足を
広げて大きな声でキーコになっていた……。



ジャンプ放送局の旅行。カメラをかまえられた瞬間に、
笑顔がカチンと音をたてて凍りついてしまうんだよぉ。



ジャンプ放送局の旅行。３泊４日で神戸へ。夜９時から
晩ご飯に出かける夜型旅行でした。

あと書きにかえて――集英社のトイレ

〝声優のちさタローがどうして『ジャンプ放送局』に入ったの？〟

という質問のお手紙が、『ジャンプ放送局』宛にたくさん届く。

〝声優になりたいのですが、どうしたらいいのですか？〟

の次に多い質問だ。

『ジャンプ放送局』とは、驚異の600万部コミック誌『週刊少年ジャンプ』の読者ページ。わたしは、高校3年生の冬からもう7年半も、放送局員というかアシスタントとして、ジャンプ読者のおハガキと楽しく遊ばせてもらっている。

でも、まさか自分がマンガの本に出ることになるとは、夢にも思わなかった。

だって、わたしはずばぬけて絵がへたで、図画工作にはかなりのコンプレックスを持っ

ていたのだ。
わたしが、まだ小学校低学年だった時――。図工の授業で〝好きな絵をかきましょう〟という課題が出た。
クラスの男の子はみんな電車やロボットの絵、女の子はお人形さんやお姫さまの絵をかいた。ところが、わたしはただ一人、ゆがんだ顔のうさぎさんの絵をかいてしまったのだ。
これは大失敗だった。
廊下にズラッと貼り出されたみんなの力作の中で、わたしのうさぎさんは、幼稚園児の落書きのように見えた。
幼な心にも立派に恥ずかしさはある。
わたしは、羞恥心の固まりになって、ボー然と廊下に立ちつくした。
(今すぐ自分の絵をはがして捨ててしまいたい)
そんな衝動にかられながら、でも、後で先生に怒られるのが怖くて、ただじっとへたくそなうさぎさんを恨めしく見つめていた。
小さなわたしのハートは、深く傷ついた。

こんな苦い経験を持つわたしが、なぜ『ジャンプ放送局』でアシスタントをしているのか。また『ジャンプ放送局』で何をしているのか。みなさんの疑問にお答えしましょう。
もちろん、わたしは、集英社の就職試験は受けていない。
きっかけは、ある日突然、偶然にやってきたのだ。

わたしは、高校3年生の春から、矢尾一樹さんのラジオ番組にアシスタントとして出演していた。
毎週スタジオに通っているうちに、いろんな肩書きを持つ謎のパワフルお兄さん、ショッカーO野さんと出会ったのだ。
O野さんは、いかにも温かい人柄が顔ににじみ出ていて正義の味方ふうの貫禄がある。たまたま別のラジオ番組のお仕事でスタジオに来ていたらしく、わたしは、録音終了後のロビーでご挨拶した。
スタントマンをしていたころのお話を、O野さんはまるで落語家のように早口で、アクションもまじえて面白おかしく聞かせてくれた。
ラジオでうまくしゃべれなくて自信を失くしていたわたしは、O野さんのパワフルなお

しゃべりで一気に元気になった。
さらにO野さんは「ぼくの妹分みたいな子だから、よろしくお願いします」と、スタジオに出入りするいろいろな人に、わたしを紹介してくれたのだ。
(なんてすばらしいお兄さんなんだ!!)
わたしは、正義の味方に助けられた軟弱な子供のように、心の底でジッと静かに感動していた。
そんなO野さんが、『ジャンプ放送局』のお話をしてくれたのは、二度目にお会いした時だった。
同じスタジオの同じロビーで、わたしはO野さんと偶然再会して、同じように座っておしゃべりした。
以前とはうって変わって、真面目なお仕事の話題になった。
「ちーちゃん、『ジャンプ放送局』って知ってる?」
O野さんは、たしか、こんなふうに切り出した。
「えっ、いいえ」
わたしは、首を横にふって、それは何ですか、と目でたずねた。

「じゃあ、少年ジャンプは？」
「はい!!　マンガの、ですよね!!　『すすめパイレーツ』と『こち亀』が大好きです」
O野さんは「おっいいね〜」と相槌を打って、週刊少年ジャンプの後ろの方にある読者ページが『ジャンプ放送局』だよ、と教えてくれた。
O野さんとわたしの会話は、教育番組のお兄さんと子供みたいだ。
「さくまあきらさん、という人と、他にもおじさんたちがいて、その『ジャンプ放送局』をやってるんだけど、とってもいい人たちなんだよ」
「へえ、そうなんですか」
「ちーちゃんも、この業界でお仕事するなら、さくまさんに会っておくといいよ」
「あ、はい」
「ぼくも、さくまさんにいろんな人に紹介してもらったり、いろいろ教えてもらったから……。ちーちゃんくらいの歳のうちにさくまさんに会ってたらなぁ、って思うよ」
O野さんがこんなにほめちぎる〝さくまさん〟って、どんな人だろう？
なんでも吸収して勉強したいと思っていたわたしは、すぐにさくまさんに会ってみたいと思った。

O野さんは、そんなわたしの気持ちをテレパシーで感じたにちがいない。
「そうだ!! 今度『ジャンプ放送局』に遊びに行こうか。ちょうどアシスタントの女の子を探してるみたいだし」
「ええっ、わたしなんかが行ってもかまわないんですか?」
「うん、みんなやさしいから大丈夫だよ。そんな真剣に考えなくても、軽い気持ちで。ぼくも、久しぶりにさくまさんに会いたいから」
「はいっ!!」
ステキな提案に、わたしは大きくうなずいた。
O野さんを本当のお兄さんみたいに思った。

10月28日、水曜日。夕方5時50分。
わたしは、O野さんとお茶ノ水駅で待ち合わせをした。
学校があったので、制服のまま出掛けた。
(どんなふうに自己紹介をして、どんなおしゃべりをしたらいいだろう!?)
わたしは、初対面の人には好感を持たれたい、といつも思う。それがマイナスに作用し

て、嫌われたくない一心から黙りこくってしまう傾向があるのだ。

だから、初対面の時は、何か話題を用意しなくちゃ、とものすごくプレッシャーを感じる。

集英社までは、歩いて5分ぐらいだった。途中、わたしの緊張は頂点に達し、そしてその後は開き直った。

(どうせ、今日は声優の世界じゃないところへ行くんだ。それなら、たとえ大恥かいても二度と会わなければいいんだ。旅の恥はかき捨てだ!!)

わたしの目標はプロの声優になることだ。今日は、面接でもオーディションでもない。

(気楽に行こう!!)

とは言っても、ふつうの高校3年生が、オフィスビルの中へ入っていくのだ。得体の知れない巨大な敵に挑むような、秘密組織の隠れ家に案内されるような、ちょっぴり恐ろしい気がした。

O野さんの後について、エレベーターに乗り、会議室の前に立った。

わたしは、気持ちをピリッと引きしめた。

O野さんが「こんにちは――!!」と大きな声で叫びながら、部屋に入った。
わたしも「おはようございます!!」と小さな声で後に続いた。
深く下げた頭を元気に上げると、そこには、とてもほのぼのとしたおじさんたちが、のんびりと座っていた。
(えっ!? このおじさんたちが、O野さんが言ってたすごい人たち……!?)
わたしは、一瞬とまどった。
会議室にいたのは、どこから見てもふつうのおじさんだったのだ。
机の上にあるたくさんのハガキがなかったら、喫茶店で山登りやキャンプの計画をしているゆかいなおじさんたちのようだ。
気楽にいこうと心に決めていたわたしは、いきなりガチンと固まった。
またしても、緊張感が押しよせてきた。
(ふつうのおじさんを装って油断させて、じつは鋭い目でわたしを審査しているにちがいない)
よぼよぼの中国人おじいちゃんが、じつは凄腕のカンフーつかいだ、というマンガか小説を、遠い昔に読んだことがある。わたしは、目の前のおじさんたちをよぼよぼ中国人お

じいさんに当てはめて、すっかり怯えてしまった。
その後は、何が起こったか、よく覚えていない。
わたしは、緊張型瞬間記憶喪失になってしまったのだ。
自己紹介したかさえ定かでない。
おじさんたちを一人一人紹介してもらって、ジャンプ放送局長のさくまさんから何か質問をされると、脂汗をかきながら必死に答えた。
それ以外は、ジッと黙って、おじさんたちがハガキを読むのを見つめていた。
そのくせちゃっかり出前をとってもらって、一緒に晩ごはんをいただいた。
こんなわたしの、ただ緊張体質なだけなのに一見おしとやかに見える態度が良かったのか、それとも、おじさんたちがわたしの制服を眩しく思ったか、もしかしたら、わたしのように面白くもおかしくもない女子高生を厳しく鍛えてやろうと燃えたのか、深刻な人手不足だったのか、なぜかはわからないけれど、わたしは、『ジャンプ放送局』の一員となることになった。
緊張していて、いつものガハハ笑いをしなかったのがよかったのかもしれない。
この日から3週間後、11月18日を記念すべき第1回目にして、もうすでに7年目に突入

して今も続いている、わたしの『ジャンプ放送局』ライフが始まったのだ。

局長のさくまさん、イラストの土居さん、レイアウトのえのさんに混ざって、わたしはアシスタントとして『ジャンプ放送局』に参加した。

わたしのお仕事は、はみ出し欄にコラムを書くことと、〝ほんのチョイ系〟コーナーに来たおハガキの質問に答えることだけだ。

コラムは、はじめのうちは、さくまさんがわたしに質問をして、その答えをわたしの代わりに書いてくれていた。わたしが書き始めたのは、半年ほどたってからだ。

一見ただ遊んでいるだけで気楽なお仕事のようだけど、やってみると、『ジャンプ放送局』はとても根気がいる大変なお仕事だった。

おハガキと会話できる楽しいお仕事だ、と喜べるようになったのは、ここ2年くらいだ。始めたころは、かなり苦しかった。

とてもつらかったことが3つある。

まず、困ったのが、写真をたくさん撮られること。

わたしは、カメラが苦手なのだ。修学旅行のスナップ写真だって、できるだけ写らないように、学校から派遣された見知らぬカメラマンのおじさんから逃げまわっていた。どうしても、カメラを向けられるとニコッとかわいく笑えないのだ。

写真は、わたしにとって後悔の素だ。

それなのに、ジャンプの本誌用、コミックス用と、やたらにたくさんの写真を、それも集英社のプロのカメラマンに撮られなくちゃいけなくなってしまった。

集英社のカメラマンと言ったら、もしかしたら酒井のりピーさんや、工藤静香さんだって撮っているかもしれない。まさか、わたしなんかをアイドルと比べることはないと思うけど（誰だ、このへちゃむくれは？）と思われたら悲しい。

そう考えると、余計に緊張して表情が固くなってしまうのだ。

えのさんが、わたしを笑わせてくれようと、昔の漫才師のようなポーズをしてくれても、どうしてもひきつった笑顔しかできない。

やっとの思いで笑っても、フラッシュと同時に目をつぶってしまう。ダメなわたしだ。

決してほめ言葉ではなく、

「表情がよく変化しますね」

とカメラマンさんにやさしくほほえまれて、わたしは困りはててしまった。
「芸能人みたいに、いつも同じ笑顔をしていないと、人に顔を覚えてもらえないよ」
さくまさんに、アイドルの笑顔を研究するようにアドバイスしてもらった。
けれど、なかなか上手に笑えなくて、鏡の前で笑顔の練習をしながら涙ぐんでしまうこともあった。
コミックス用に、局員みんなで旅行をした時も、カメラはわたしの大敵だった。
「ちーちゃんは、すぐ目つぶっちゃうから」
「使えない写真が多いから」
と、さくまさん、土居さん、えのさんが3人でシャッターを切りまくるのだ。
シャッター音がプレッシャーになって、どんどん固くなっていってしまう。
いつまでたってもアカぬけないわたしだった。

次に困ったのが、眠くなってしまうこと。
わたしは、完徹ができない、子供のような体型、いや体質なのだ。
『ジャンプ放送局』の打ち合わせは、夕方4時くらいから集まって、夜11時ごろまで続く。

遅い時は、夜中の1時をすぎることもあった。
ちょうどいい温度に保たれた会議室で、机に向かって原稿とにらめっこしていると、目がしょぼしょぼしてくるのだ。
とくに、晩ごはんを食べた後、夜8時すぎは地獄だ。鉛のように重いまぶたを、息を止めながら必死に上げていないと、本当に眠ってしまいそうになる。
長時間ずっと椅子に座っているから、背骨が自己主張するように痛む。足もむくんでくる。
わたしは、眠けざましと運動をかねて、よく廊下で体操をした。
足を持ち上げて、蹴りを入れるように空を切ったり、手のひらで風を押したりすると、血のめぐりがよくなって頭が冴えるのだ。
でも、トイレに立ったえのさんが、廊下のまん中で妙な動きをしているわたしを見て「いつも不気味に思っていた」と後々話してくれた。
そして、究極につらかったのが、さくまさんの厳しい原稿チェックだ。
43文字×3行のはみ出しコラムを、毎週2本ずつ書くだけなのに、わたしは何度もボツ

を食らい、トイレで泣いた。
まず、わたしのコーナーに来たおハガキから面白い質問ネタのものを5枚くらい選ぶ。それをさくまさんに見せて、掲載する1枚を決めてもらう。ただこれだけのことなのに、さくまさんのチェックは鋭くて厳しい。
「ちーちゃん、ダメだなぁ。他のハガキない？」
「は、はい……」
「もっと話題が広がっていくネタの方がいいよ」
「はい。……あの、じゃあ、これは？」
「なんだ、こっちの方がいいじゃない。ちーちゃん、自分が面白い答えを書けて、ちーちゃんの答えにまた反響がくるような、そういうハガキを選ばなきゃダメだよ」
わたしが最初に面白いと思う質問ネタは、どうも的はずれな場合が多いらしい。
さくまさんは、いつもおおらかな口調だけど、ビシッと釘をさすように注意する。
それから、わたしは、さくまさんが選んでくれたおハガキの質問ネタを原稿用紙にうつして、答えを書く。できるだけ話題が広がっていくように心がけるのだ。
わたしは、考える時間が長くて、書くのが遅い。最低でも1時間、いい答えが浮かばな

い時は2時間以上悩んでしまうこともある。
文字数をぴったり43文字×3行に収めるのも難しい作業だ。どうしても長くなってしま
う文章を、うまく削らないといけない。ピタッとはまる言葉を探すのは、まるでパズルゲ
ームみたいだ。簡単そうで、なかなか見つからないのだ。
やっとの思いで書いた原稿を、おそるおそるさくまさんに差し出す。
さくまさんは、ゆっくり原稿を読む。
OKの時は、すぐに「はい、いいよ」と原稿を返してくれるけれど、たいてい、じっと
原稿用紙を見つめて止まってしまう。
(あっ、しまった!! きっとやり直しだ!!)
わたしは、死刑宣告を待つように怯えながら、さくまさんのひと言を待つ。
「主語がない」
よく注意されるのは〝主語〟だ。文章を短くしようとすると、どうしても主語がなくな
ってしまうらしい。それに、今の若者の主語なし会話も、わたしの文章に悪く影響してい
るようだ。
さくまさんは「まあ、これでもわかるんだけど、不親切だな」とわたしに原稿を返す。

わたしは、また1時間も2時間もかけて、新しい文章を書き直すのだ。主語の他にも「多くのことを書きすぎ」「状況が見えない」「面白くない」「広がらない」と、NGはどんどん出る。

(ずっとこのままOKが出なかったら、どうしよう……)

だんだん心細くなって、あせりと恐怖心につつまれる。

終わらないと帰れない。時間はどんどん過ぎる。眠くなってくる。

わたしが書き終えないと、他の局員のみなさんも帰れないんじゃないか、と思うと、ますます気持ちがせいて集中できない。

いじわるされてるんじゃないか、と被害妄想してしまうほど、わたしは何度も原稿を直した。

必死に考えてまとめた文章がボツになる。そうすると、もう頭がカラッポになってしまって、次のネタが浮かばないのだ。

いつまでも終わりがこない恐怖は、日本人形の髪がのびるよりもおそろしい。

(もう!! ちさは物書きじゃないんだから!! こんなに厳しくしないでよ――っ!!)

わたしは、心の中で叫びながら、トイレでこっそり涙をぬぐった。

けれど、今にして思えば、最初に厳しくされたことがよかったのだ。つらかったやり直し攻撃も、全部、自分の実になった。

当時〝怒られた〟と思っていたことは、じつは〝教えられていた〟の間違いだったのだ。

こうしてエッセイが書けるのも、さくまさんが、未熟な小娘のわたしに、ていねいに文章の伝え方を教えてくれたおかげだと思う。

ただただ感謝の気持ちでいっぱいだ。

あんなに恨んだ原稿用紙も、今では、3枚かさねて2つ折りにして、いつもかばんのすみっこに収まっている。

まるでお守りのように。

これからも、ずっと、わたしを伝える言葉たちと遊んでいたい。

もし、くじけそうになったら、集英社のトイレに泣きに行こう。

横山智佐・声優ほやほや年表

1987年

3/5 「ロボットカーニバル」イベント
4月 高校3年生になる
4/3 「アニメ情報局ラジオマガジン」第1回録音
5/26 「ブラックマジック・M-66」録音(整音スタジオ)
6/10 「ロボットカーニバル」録音(アバコスタジオ)
6/13, 21 JOYCONイベント
6/28 「ブラックマジック・M-66」発売日
7/9 矢尾さんのビデオ「わがまま」に出演
8/19 「アニメ情報局ラジオマガジン」公開録音
11/18 「少年ジャンプ」の編集部に行く
12/23〜24, 28 「DASH!!」レコーディング

1988年

1/24 富士急ハイランドでイベント
3月 高校を卒業
4/10 アニメフェスティバル(プレゼンター)
5/18〜21, 23, 6/1 「全酪連」VP撮影
7/12 「つるの恩返し」撮影
8/9 ポニーキャニオン カセットテープ録り
10/1 「バトンズとラスティー」録音(ユリーカスタジオ)
10/6 「日本語教育用ビデオ」撮影
10/22 「孔雀王」録音(アオイスタジオ)
10/24 「ポケットザウルス」録音(ユリーカスタジオ)
11/1 「あなたの生活設計」撮影
11/4 「レックスハンバード」アフレコ
11/9〜14, 20〜23, 25 「駿府博」撮影
12/12〜13 「ホリデイズ・イン横浜」VP撮影
12/19 「ファミコンジャンプ」ラジオCM

1989年

1/17〜19 「ミニ四駆」レコーディング
2/28 「外国人教育テープ」
3/1 「ミスター味っ子」
3/5 「ミニ四駆」イベント
3/17 CD-ROM「天外魔境ジライヤ」
3/31 アニメ「稲村の日」
4/1 「ミニ四駆」のイベント・新潟
4/3 「ミニ四駆」のイベント・新宿
4/29 コロコロRCカーグランプリ
5/4 「DASH!!」豊橋イベント
5/5 春のヤングフェスティバル
5/18 「ミニ四駆」のイベント・静岡
5/22 笑っていいとも
6/4 資生堂サマーキャンペーン
6/14 COOPさわやか劇場
6/15 全日空・夏休み用DJ
6/18 「コロコロ」イベント・北海道
6/27 「瑞雲」アテレコ
7/22 RCカーグランプリイベント・池袋
8/3 「アイドル伝説エリコ」
8/5 たたら祭り
8/10 タミヤ・ジャパンカップ静岡
8/28 「桃太郎伝説」
8/29 タミヤ・ジャパンカップ東京
9/6 「ミスター味っ子」看護婦役

あと書きのあと書き

高校を卒業したわたしは、〝大人の世界〟にあこがれていました。大人の世界とは、ルパンに会える、お仕事の世界です。わたしは、ビデオアニメで念願のデビューをすることができました。でも、わたしが辿りついたのはゴールではなく、新しい道のりの真っ白なスタートラインでした。はじめの一歩をふみ出して、たとえよちよち歩きでも前に進んでいかなければ、大人の世界の一員になる前に、ルパンに会う前に、すべてが終わってしまいます。

『ルパンに会いたくて・2』では、大人の世界ではじめて物語を記しました。デビュー当時は、やっとハイハイを始めた赤ちゃんのように、あぶなっかしく、だけど自分では危険に気づかず、とにかく必死に歩んでいました。そんな大人への階段をのぼる途中で、わ

たしは、人と出会うことの大切さを知りました。ラッキーなことに、わたしのお仕事は、人の紹介によってどんどん広がっていったのです。誰かに紹介してもらう時に恥ずかしくないように、いつも輝いていているわたしでいたい、と強く思います。

先日、劇場で『ルパン三世・くたばれ！　ノストラダムス』を観ました。ルパンが元気に暴れている姿が目に飛び込んできた瞬間、涙でスクリーンがにじみました。目を閉じると、ルパンの声が聞こえました。わたしが愛してるルパンは生きていました。スクリーンの中で。そして、わたしは、わたしの心の中にもルパンが生き続けていることを確認しました。

今まで、ルパンがいたからがんばってこられたのです。これからも、ルパンに会うことがわたしの目標です。

横山智佐 よこやま・ちさ

1969年12月20日、東京都生まれ。OVA『ロボット・カーニバル』で声優デビュー。『天地無用！』『空想科学世界ガリバーボーイ』をはじめ、数多くのテレビアニメで活躍中。昨年6月に初のエッセイ集『ルパンに会いたくて…』、今年5月にはフォトエッセイ集『天使がくれた休日』(ともに小社刊)を刊行。また、週刊少年ジャンプの人気読者ページ『ジャンプ放送局』のアシスタントのほか、CDアルバムを出したり、私設・放課後のクラブ活動『CLUB-CHISSa』を運営したりと、マルチアイドル声優ぶりを発揮している。

ルパンに会いたくて♥♥♥2
横山智佐・声優ほやほや物語

発行　初版発行　1995年9月25日

著者　横山智佐
発行者　佐藤辰男
発行所　株式会社メディアワークス
〒101 東京都千代田区神田駿河台1-8
東京YWCA会館
電話03-5281-5213(編集)
発売元　株式会社主婦の友社
〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9
電話03-3294-1130(営業)
装丁者　荻窪裕司
編集　片岡英典(farce)
印刷・製本　共同印刷株式会社

ISBN4-07-303500-2 C0074



ルパンに会いたくて…2

横山智佐・声優ほやほや物語

ルパンに会いたくて…2

横山智佐
声優ほやほや物語

発行・メディアワークス
発売・主婦の友社



ルパンに会いたくて♥♥♥2

発行・メディアワークス　発売・主婦の友社
定価1200円（本体1165円）

ISBN4-07-303500-2 C0074 P1200E

ルパンに会いたくて…2

横山智佐
声優ほやほや物語

発行・メディアワークス
発売・主婦の友社

ルパンに会いたくて…2

発行・メディアワークス　発売・主婦の友社
定価1200円（本体1165円）

ISBN4-07-303500-2 C0074 P1200E

横山智佐の本

ルパンに会いたくて…

天使がくれた休日



ルパンに会いたくて♥♥♥2

横山智佐・声優ほやほや物語

ルパンに会いたくて♥♥♥2

横山智佐
声優ほやほや物語

発行・メディアワークス
発売・主婦の友社

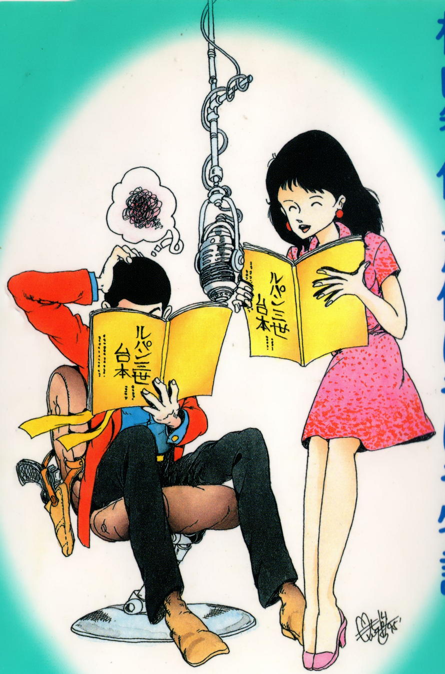
ルパンに会いたくて♥♥♥2

発行・メディアワークス　発売・主婦の友社
定価1200円（本体1165円）

ISBN4-07-303500-2 C0074 P1200E

ルパンに会いたくて♥♥♥2

横山智佐・声優ほやほや物語



ルパンに会いたくて♥♥♥2

横山智佐
声優ほやほや物語

発行・メディアワークス
発売・主婦の友社

ルパンに会いたくて♥♥♥2

発行・メディアワークス　発売・主婦の友社
定価1200円(本体1165円)

ISBN4-07-303500-2 C0074 P1200E

横山智佐の本

ルパンに会いたくて･･･

天使がくれた休日

カバーイラスト モンキー・パンチ